

歳々南枝日に向つて開く。

尙ほ光圀は、表忠碑の保存にも心をつくして、多くの田畑を廣嚴寺に寄附し、永代香華の料にあてたのである。當時、幕府では、光圀の舉を見て、勤皇心を煽り、反幕府の精神を吹き込むもの如く思つたが、これを流石に表面から咎める迄には事を荒立てなかつた。唯一夜のうちに、楠公碑が出来上つたといふことにして了つて、素知らぬ顔をして済ませた。そこに、何となく、舊幕時代の長閑な気分が漂うてゐる。

(3) 光圀の心血を注いだ『禮儀類典』と『釋萬葉集』

楠公表忠碑と前後して、企圖された光圀の文化事業ともいふべきは『禮儀類典』と『釋萬葉集』の著作・出版のことである。すべて光圀の著作・修撰は、直接、間接に尊皇と深い因縁を持つてゐる。

室町時代以來、戦亂絶ゆる間もなく、爲めに長くも、朝廷の式微を來たし、必要な公事、

儀式のことさへ大分、分らなくなつてしまつた。光圀は深くこの事を慨き、四方拜をはじめ追儼に至るまでの恒例・式典を類聚するの必要を切に感じた結果、こゝに『禮儀類典』五百十四卷(目錄一卷・恒例百三十卷・臨時二百八十卷・附圖三卷)の編輯を決行することゝなつた。つまり、光圀は、これによつて、式典の復興を計り、進んで朝威を發揚したいと考へたのである。

この事業も、當時至難の一つとせられ、その成行を危ぶんだものが少くない。然し光圀は、その必要のために、どんな努力、どんな犠牲をも拂つて、進行しようと思つた。このため、光圀は、彰考館別館を設け、その編輯總裁には、藩の學者、安藤爲實(抱琴)を任用した。爲實は、年山(爲章)の兄で、『續有職故實』二卷を著し、この方面の權威である。そして爲實のもとに、考勘十五人、書寫二十八人、校合十人、出納四人、檢察三人を置き、貞享三年編輯をはじめ、仕事は隔日にするこゝとした。

この仕事につき、光圀は深く慎重を期し、自分一代のうちに完成しようとせず、十分に備はるべきことを求めた。そして一方、先づ公卿たちの批判を求め、教へを請ふことが何より

も必要であるのを知り、旨を爲實に傳へて、四方拜・御薬・朝賀・三節會・朝覲・行幸・二宮・大饗などを類聚せしめた。それを今出川内府公規に頼み、有職故實を知る公卿の一覽に供したのである。

最初、それらの公卿たちは、水戸でこの方面に通じたものが少いのを知り、ひどく侮り、冷笑の眼で原稿を見たところが、類聚の方法正しきのみならず、内容の上にも些の誤りがないので、深く恥ぢ入った。そして感歎の餘、彼等は、

「嗚呼朝威が旺んな世ならば、この書は當然、勅撰せらるべきである。ところが、いつの間にか公武、地をかへ、かやうの企てが關東の奥で行はれようとは思はなかつた。が、誠に有難い企てで、今日有用の書である。」

といつた。この事いつか 叡聞に入ると、九重におかせられては 叡感深く思召され、特に『禮儀類典』の題名を賜つた。その上、書目に洩れてゐるところの撰集・祕記・新儀式及び『伏見院御記』『深心院關白記』『後深心院關白記』なども貸與せられたのである。

それらは、爲實・爲章らもまだ見ないものが多く、文献上、有力な、意義多いものであつ

た。そしてこの事業は、相當困難が多いため、完成されたのは、享保十九年、水戸第五世宗翰の時である。その際、水戸から『禮儀類典』を幕府に献上し、幕府これを朝廷に奉獻し、光圀の志は、ここに全く達成された。

この『類典』と共に、光圀が魂を打ち込んだのは、『萬葉』闡明の仕事だつた。光圀が『萬葉』に親しんだのは、その文學の嗜好にもよるが、主なる原因は、『大日本史』の編修に當つて、日本の古學・神道を研究せねばならぬ上から、これに關係の深い『萬葉』を知る必要を痛感したによる。つまり、古代日本の言語・風俗を研究するのに、『萬葉』を重んじなければならぬとしたからだつた。

當時、光圀は、これを讀記するほどに讀んだと見え、安藤年山は、「公は萬葉を好み給ひて、二十卷を大方、諧に覺えたまへり」といつたほどである。今日でいへば、光圀は萬葉學者の一人だつた。

それに光圀は、在來の保守の流れを追ふ萬葉研究家には與みせず、新しく、自由研究をしてゆく人々に共鳴した。このため、光圀は、『萬葉』の註釋を先づ大阪の下河邊長流に囑託

した。この點、當時の人々が尙ほ堂上風や貞門一派の有賀長伯らの『萬葉』學説を追うてゐたのに對し、全く新しい立場に光圀は起つたのである。

そこで下河邊長流の萬葉通であることを聞き、彼を招聘したが、狷介・不羈の彼はこれを辭した爲め、筆紙料として五十人扶持を長流に與へ、『萬葉』註釋を依囑したのである。

長流は、大和宇田の武士の家に生れ、早くから國文學を好んだ。最初、片桐氏に仕へたが、事情あつて致仕し、後、江戸へ出て職を求めたけれども失敗に終つた。そこで大阪に歸り、更に京の三條西家に數年間仕へて、『萬葉集』の抄寫に従事してゐた。それから此處を辭して、隱士生活に入り、歌學に没頭した。

當時、長流は、次第に我儘となり、心が向かないと、富豪の招請にも應じない。晝寝してゐるときは、誰が來ても、逢はなかつた。従つて、光圀がわざ／＼安藤年山を遣はして、長流の意見を問はせても、一向、感激もせず、懶惰に日を送つて、『萬葉』註釋も、はか／＼しく進まないうちに、六十三歳で世を去つてしまつた。

(4) 光圀と僧契沖

さうした長流の冷淡さに對して、光圀は少しも怒らぬ。更に今度は、長流の友、釋契沖に『萬葉』註釋のことを改めて依囑した。最初、光圀は、契沖を水戸に招聘する考へてゐたが、契沖が固辭したので、やむなく、扶持を與へて、註釋のことだけを頼んだわけである。

契沖は、長流と極めて親しかつた。然し、性格は大分ちがひ、溫健で、飾り氣がなく、わが儘なところもなかつた。彼は、攝津尼ヶ崎の武士の家に生れたが、幼少の時、佛門に入り、大阪にちかい今里の妙法寺に居つた。それから發奮して、高野山に登り、十年の修行を積んだのである。

かうして成業の上、大阪生玉の曼荼羅院の住職となつた。が、寺務の煩雜を厭うて和泉國久井といふ閑寂なところに住み、五年の年月をこゝに送るうちに、附近の池田郷萬町村の土豪、伏屋重賢と親しくするに至つた。

伏屋の厚意で、契沖は、その邸内の養壽院に住むこととなり、伏屋家所蔵の本を自由に讀む便宜を與へられた。この時代に彼は主として國文學を研究し、蘊蓄を深めたといはれる。後、先師の言葉によつて、再び妙法寺に入り、それから高津に引移らうとすると、伏屋家から以前建てた養壽庵をその儘、契沖に寄進したので、圓珠庵と名づけて住んだ。これが契沖終焉の場所である。

契沖が光圀に知られたのは、晩年のことで、その依頼によつて『萬葉代匠記』初稿本一を執筆しはじめたのは、天和三年、四十四歳のときである。爾來、怠ることなく、研究を重ねて稿を續け、初稿本がすっかり出來たのは、貞享四年、四十八歳の折だつた。然し、尙ほ當時は参考書に乏しかつたので、再びこれを訂正すべき必要を感じ、光圀の厚意によつて、中院本・飛鳥井本その他古寫本を借り入れ、到るところに訂正を加へた。かうして『萬葉代匠記』精撰本が出來たのは、元祿三年、彼の五十一歳の時である。

この著述に對し、光圀は、満足の意を表し、その勞を犒らふために、絹三十匹、白金一千兩をあたへた。これを契沖は妙法寺に寄附し、貧しい人々の救済にも充てた。そして契沖の

『代匠記』が光圀の萬葉研究熱を一層刺戟し、板垣宗愴・伴香竹らを用ゐて、こゝに『釋萬葉集』五十卷の編述に著手したのである。蓋し光圀が『萬葉』註釋を自ら爲さうと考へたことは、餘程以前からで、これについては、板垣宗愴・山本春正・清水宗川らに命じ、先づ註釋を爲さしめたことがあつた。が、春正は天和元年光圀に仕へてから間もなく京に歸つてしまひ、宗川は、『萬葉』に關する書物の校合を爲し得たにすぎぬ。それ故、到頭、長流・契沖らへこれが註を依頼するのやむなきに至つたが、光圀には、尙ほ註の上で、契沖の見解と異なるところがあつたから、別に稿を起すに決し、最初、板垣宗愴が命を承けて、主としてこれに當つてゐた。

光圀の晩年は、『釋萬葉集』に、その精力を専注してゐたといはれる位で、薨去する兩三日前まで、頻りに『萬葉』研究にいそしんだのである。この時は、まだ一二冊出ただけで、完成には遠かつた。これに光圀が眼をとほし、この方法のもとに執筆を進めたならば、『代匠記』以外に、適意の著述が生れようと期待し、それを何よりの楽しみにしたと、傳へられてゐる。

かく光圀が心にかけてゐた『釋萬葉集』五十冊がすっかり出来上つたのは、享保十八年八月のことで、これは、最初、宗愴が努力し、十六、七巻まで書いたところが、元禄十一年歿したので、伴香竹がこの仕事を継ぎ、更に安藤年山も参加した。

巻一の註釋、凡例の二冊が出来たので、安藤年山はこれを携へて入洛し、清水谷大納言の手を経て、仙洞の叡覽に供し奉り、有意義のこと故、全部、完成するやうにといふ御嘉賞の御言葉に預つた。それは恐らく地下に於ける光圀の満足したところであらう。かく光圀は、萬葉學の開拓に新紀元を開くことに貢献し、且つ記・紀の歌謡についても、契沖に依囑し、『厚顔抄』三巻を全うしたのである。

そのほか、光圀は、弘仁時代から承應時代に至るまでの序跋・日記・隨筆などの粹をあつめた『扶桑拾葉集』三十巻を元禄二年に刊行し、これを後西院天皇に奉献した。題は天皇から特に賜つた光榮に浴したのである。

(5) 光圀の尊皇と文學上の努力

光圀は、文學上に多くの寄與を爲し、且つ再三、叡旨を奉じて、詩文を皇室に上つたので、元和元年、靈元天皇から、「武を備へ、文を兼ねて、絶代の名士なり」と仰せらるゝ光榮を荷つた。

光圀が最初、後西院天皇の御勅題「遠望」に對し、律詩三首を謹賦して、京天龍寺の僧虎林のもとによせ、奉献したのは、延寶三年のことである。ついで元和元年、靈元天皇の詔を奉じて、『鳳足硯銘』を上り、御嘉賞を賜つた。

鳳足硯！それは、靈元天皇の御先考の御遺物で、若狹に産出した材で作られ、その色は紫を凝らした如く、温潤、玉のやうな美しさがあつた。長さは一尺、濶さは七寸、厚さ一寸三分で、實に立派な寶物である。天皇は深くこれを愛用したまひ、米元章の「硯史」のうちから、「鳳足」の二字を採つて、これに名づけられた。そこで、銘を光圀に作るやう命ぜられた

備武兼文
 敕賜
 絶代名士



雪朝遠望(敕願)



敕賜
 備武兼文
 絶代名士



義公印章(一) (水戸徳川公爵家藏)

のである。

光圀は、この御恩命に感激し、文中、硯の美を賞讃し奉ると共に、これを、愛用したまふのは、御思召が大孝にあることを申上げまゐらせ、「孝理上に行はれて、徳教下に加はる。萬邦靡然して風に嚮ふ」と、謹記したのである。

この光圀の銘は、靈元天皇の敎感に入り、特に宸翰を賜つた。そのうちにおいて、天皇は畏くも、光圀を賞揚したまひ、

爰に宰相中將源朝臣、武を備へ、文を兼ねて、絶代の名士なり。因りて命じて彼硯の銘をしるさしむ。其文、忠義の氣を含み、こと葉金玉の聲をなせり。これに酬るに、我なにかせん。唯遠く此硯を傳へて、久しく此文を残さんといふ。

と仰せられ、次に記し奉る一首の御製を下賜せられた。

つたへゆく硯の石の齢もて世々にのこらん言の葉ぞこれ

この宸翰を押し戴いて、光圀は恭しく跪きつゝ拜誦し、優渥な聖恩に心から感激した。そしてこのおもひをいつまでも記念するために、「備武兼文・絶代名士」の御句を明僧心越に依

響して篆刻せしめ、雅印の關防として終生、これを用ゐたが、その印のうちには「敕賜」の二字を特に加へたのである。

この前後、光圀が朝命を奉じて上つた詩は五十篇に及び、和歌も亦五十首に達した。その他、詔によつて、立坊・立后の儀節について記述した書を天和三年に上り、貞享元年には、『尙齒會詩』一卷、『五月雨記』一卷を上つた。かく光圀は、文學の上で始終、皇室に誠を捧げ、恭敬の態度を會つて失はなかつた。且つ儒者中、將軍のことを大君または國君と書いて帝王に擬するの非を戒め、親王・三公（太政大臣・左右大臣）の手翰に接したときは、必ず跪いて推し戴いてから披見し、その手翰のうちの名字・花押は、散逸汚損せんことを恐れて、切り抜き、焼却した。

その頃、文學上、光圀が深い交渉を持つた朝臣の一人に、歌道に秀でた中院通茂（大納言）がある。通茂の父通村は、夙に幕府の態度に嫌らず慷慨してやまなかつた硬直の人だつた。通茂は、父の氣象を受けついで、心を皇室に捧げた。そして時々、勅使として、江戸へ來た人で、光圀は、この人に深く心契するところがあつた。ある年の春、通茂が勅使となつて江

戸に下り、光圀を小石川の舊邸に訪ふと、櫻花がばつと開いてゐたので、光圀は、當座の感想を歌にのへ、

櫻戸の花のあるじとたのますばいかで待つべき雲の上人

と詠じた。秋に入つて又、通茂が勅使として下向、再び光圀を訪ふと、光圀は、秋の趣を一つにあつめたとも思はるゝ菊の花を通茂に贈つた。通茂は、喜びの色を浮べて、

手折りつる心もふかき色に香に垣根の露をおもひやられて

と詠んだ。すると、光圀は返歌として即座にかう答へた。

ことの葉のふかき心の色香には露もはしなき宿のしら菊

かく光圀は、歌の上で通茂と交りを深うし、互に敬愛した。その後、通茂がある事情で志を得ず幽居したのを聞くと、光圀は、これを慰めるため、木をもつて、隅田川の都鳥を作らせ、そのうちへ金銀で花紅葉の形を刻ませた名香を入れ、一首の歌を添へて通茂のもとへ届けた。

都鳥あさる浪間にしづむともやがて雲井にたちぞ歸らん

通茂は深くこれに感謝し、

思ひきやしづむみくづを都鳥心にかけてこととはんとは

と答へて、はれなくした心持になつた。それから光圀は、通茂の七十の賀には、安藤年山（爲章）を賀使として、通茂のもとへ遣はし、賀品及び賀詩を贈つた。それには、歌壇の元老として、長壽を祈り、敬愛の誠をのべたのである。

(6) 文事上から朝鮮使節に向つて國威發揚

こゝに文事の上で、光圀が尊皇心から國際上、日本の國威を高めようとした一事がある。それは、朝鮮使節の問題についてであつた。豊臣秀臣の朝鮮征伐以後、家康は、平和主義のもとに海外各國と交際し、朝鮮に向つても、國交恢復につとめた。

爾來、朝鮮では、將軍の代がはり毎に使節を派遣し、次第に日本と融和した形を示したが、一方では、日本を軍國主義に偏つた如く考へ、文事の上では、常に日本を輕侮した。これが

奉送
朝鮮國東山尹公使
日本國歸
萬里勞來聘
三韓尋舊盟
衣冠皆輟曉草木亦
知
名迹爾已臨別默然
不盡情
鄉人若相問文物屬
昇平
常山源光圀續首

後に新井白石の強硬な對鮮方針を展開する動機となつたのである。

かく朝鮮が文事上、日本を侮つて、禮儀の上に缺けるところがあるのを逸早く看破したのは、光圀である。折柄、天和二年八月、朝鮮通信使尹趾完・李彥綱・朴慶俊の三人が江戸に來て、將軍綱吉に敬意を表した後、光圀に向つても、交情をあたためるために、音物を贈つて來た。ところが、その目錄書は、餘りに簡にすぎて、禮意に缺けてゐるので、副將軍の地位にある光圀としては、これをその儘、見のがして置けぬと考へた。その目錄書には、かう記されてゐたのである。

奉呈

水戸公閣下

鷹子壹連 人參一斤 虎皮二張 白照布五匹 芙蓉香貳拾本 黃毛筆貳拾本 眞墨貳拾
笏

際

壬戌九月 日

通信使④

これより先、光圀は、學問研究の上から、幕府儒官の紹介を得て、藩士今井魯齋・中村篁溪を朝鮮使節のもとに派し、學士成琬、醫官鄭丰俊らを訪問させ、國字及び草木・禽獸について質問したことがあつた。さうした因縁もあるので、朝鮮使節は、將に歸らうとするとき、光圀に方物を贈つたわけであつた。

ところが、前記奉呈狀に禮儀の上から缺陷があるのを見て、光圀は、日本の面目に關すると考へ、非禮にわたる點を三つばかり指摘した。それは、方物の品物のみ記して、使節の姓名を書かぬこと、三使の贈るものであるにかゝはらず、唯一つの印のみ捺してあること、印文を見ると、尹趾完のものと思はれるが、その名を記さなかつたのは、禮に背くことなどである。

そこで光圀は、以上の旨を漢文でまとめて中村篁溪を朝鮮使節の旅館に派し、學士成琬に示して、回答を求めたのである。ところが、使節は、最初から、日本は文事にうといと思つて、侮つてかゝり、文辭の上に儀禮をつくさなかつた落度があるので、ぐつと行詰り、いつ迄も答へなく。

そこで光圀は更に三四日の後、中村篁溪を再び朝鮮使節のもとに赴かせて、返答を督促させ、同じ日(九月六日)に藩士佐野藤衛門・吉沼佐介に命じて、朝鮮使節へ手翰を贈り、且つ銀三百兩を呈した。その際、光圀はそれ／＼文辭に意を用いた書を各々三使に與へて、禮儀を正しうした。

朝鮮使節は、これを見て、日本にも、立派な漢文を書くものがあることを知つて、敬意を表し、九月七日、三使もそれ／＼光圀に鄭重な返書を贈り、金圓受納のことはこれを辭した。で、光圀は再び手翰を與へ、他意なき旨を述べたので、三使は改めて金圓を受納する旨を答へ、謝意を表したのである。が、曩きに差出した奉書の不備、非禮については、やはり沈黙を守つた。

當時、朝鮮のことについて、外交上、關與することを許されてゐた宗對馬守の臣、小山朝三は、この消息を知つて、深く光圀の精神に共鳴し、

「在來、朝鮮使節のことについては、いろ／＼の弊害があつて困つたのですが、水戸の殿様御心づくしにより、今後、弊害を改めることが出来ませう。眞に珍重に存じます。」

といつた。これにより、朝鮮使節の非禮な態度には、宗對馬守の方でも、大分、眉をひそめてゐたことが察せられる。

當時、光圀は、國交上、よく禮儀を全うすることにつとめ、天和二年九月十二日、朝鮮使節一行が歸國すべく、江戸を出發して、神奈川方面に一泊したとき、藩士齋藤平介を使者として、旅館を訪問させ、送行の詩及び紙一箱を贈つたのである。その詩は慰勲をつくして、至誠を披瀝したので、三使も亦之に和するの詩をそれ／＼光圀に贈り、極めて禮意をつくした。當時、光圀が尹趾完に與へた五言詩は、かうである。

萬里來聘を勞し、三韓舊盟を尋ぬ。

衣冠皆賜を驚かし、草木も亦名を知る。

遽爾として已に別に臨み、黯然として情を盡さず。

郷人若し相問はゞ、文物昇平に屬せり。

これに對し答へた尹趾完らの詩は、かうである。

薄儀來つて賀慶す、大信豈盟を申んや。

未だ扶桑に入らざるに、先づ聞けり水戸の名。
周旋懿範を仰ぎ、委曲深情を荷ふ。

別に臨んで仍ほ相勉め、俱に宜しく太平を賛すべし。(尹趾完)

○

海外知己に逢ひ、天涯即ち比隣。

一言手を携ふるの地、傾蓋心を許すの親。

使節初めて粵を辭し、歸程遠く秦に向ふ。

新詩餘意あり、百里行人を問ふ。(李彦綱)

(7) 那須國造碑の再興

なほ、光圀の文化事業として、もう一つ記すべきことは、那須國造の碑及び多賀城の碑を再興した快舉である。日本に於ける石碑で、一番古いのは、持統天皇の御宇に作られた野州

に於ける那須國造の碑(那須郡湯津上村)だといはれてゐる。

それは史上の記念として、大切に保存せられねばならぬにかゝはらず、空しく打ち捨て置かれ、その石碑は、荒野のうちに埋もれて全く忘れられてゐた。これを光圀が知つたのは、天和三年六月、親しく那須國造の碑を訪うたときで、その際、大金重貞が呈した『那須記』を見て再興の決心をしたのである。ついで光圀は、貞享四年九月、再び下向し、佐々十竹に命じて、石碑の考證をなさしめ、それが持統天皇の御宇に作られたことをほゞ確かめていよいよ保存の志を固めた。

その後、光圀は、元祿四年春に至つて、いよいよ工事に着手するに當り、この事を心越禪師に語つて、碑文の調査方を依頼し、心越は快くこれを引き受けて湯津上村にちかい梅ヶ平村に赴いた。その大金重貞は光圀を尊敬してゐるので、その邸に逗留することにし、重貞らの案内で、那須國造碑を訪うた。

その際心越は、掘り出した石碑の文面を巧みに石摺にして持ち歸り、これを光圀に報告した。そこで光圀は、大金重貞の名を借りて工人を雇ひ入れ、再興に取りかゝつた。その時、

光圀がかうした由緒を持つ碑が顛倒、埋没してゐることを奥羽出張中の水戸史官から聞いたのは元禄六年のことである。そこで光圀は、その衰頹を惜しみ、はじめ佐々十竹を派して、調査に當らせた。その結果、元禄七年、同地の領主仙臺侯伊達綱村と計り、土中に埋もれてゐた坪^{ツツ}碑^{いし}を掘り出して修工し、これを多賀城址に据ゑた。この事情については、詳しいことが傳へられてをらぬけれども、光圀が一臂の力をこの保存のためにつくしたことは疑ふの餘地がない。

そのほか光圀は神武天皇の御陵修復の急を主張し、儒臣森儼塾にその趣意書を起草させたが、將軍綱吉の反對にあひ、實現に至らなかつた。また當時、光圀が名勝保存と祖先顯彰の意とをかねて、源頼義・源義家の祠堂を花の木村の旌櫻寺境内に建てたことは、一つの意義があつた。そこは今の太田町にあつて、昔、源頼義が奥州征伐に赴いた歸途、この地に立ち寄り、旌竿を遺したところが、それは櫻樹からなつてゐたので、いつの間にか萌芽を生じ、立派に成長して、花を着けるやうになつた。この花が變り種で、葦の裏から更に小旗の形をした一片が出て珍しいので、人々の觀賞するところとなつたといはれる。

光圀は、この由緒ある地を愛し、自ら建てた祖先の祠堂には、頼義・義家兩將軍の神主を安置し、脇書に遠孫源光圀と書いた。その神主を堂に迎へる儀式の日には、烏帽子、道服を著けてこれに臨み、深く崇敬の誠を致した。現に名物の櫻が今なほ残り、年々、開花すると

さふ。

第九 西山莊に於ける光圀の生活

(1) 光圀の隠退

政治家として、花々しい活動を續けた光圀が西山莊(太田町)に隠退したのは、元祿三年、六十四歳の時である。

光圀と嗣子綱條との關係は、極めてよかつた。既記したやうに、光圀は、兄頼重の子、松千代(綱方)采女(綱條)の二人を養子に迎へたが、松千代は寛文十年、病歿したので、采女が綱條と名乗つて、嗣子となつた。綱條は、よく光圀に仕へ、その教訓に従つたので、光圀は意を安んずることが出来た。そこで元祿三年、跡を繼がせることにしたのである。

光圀の隠退は、各方面から惜しまれた。その江戸を出發して、水戸へ歸るとき、送別の詩歌をよせたものが多い。それは雨の降る日であつたが、光圀は、人々の厚情に酬いるため二

首の歌を詠んだ。

いとどなほ名残を思ふ老の浪たちかへるべき世をも知らねば

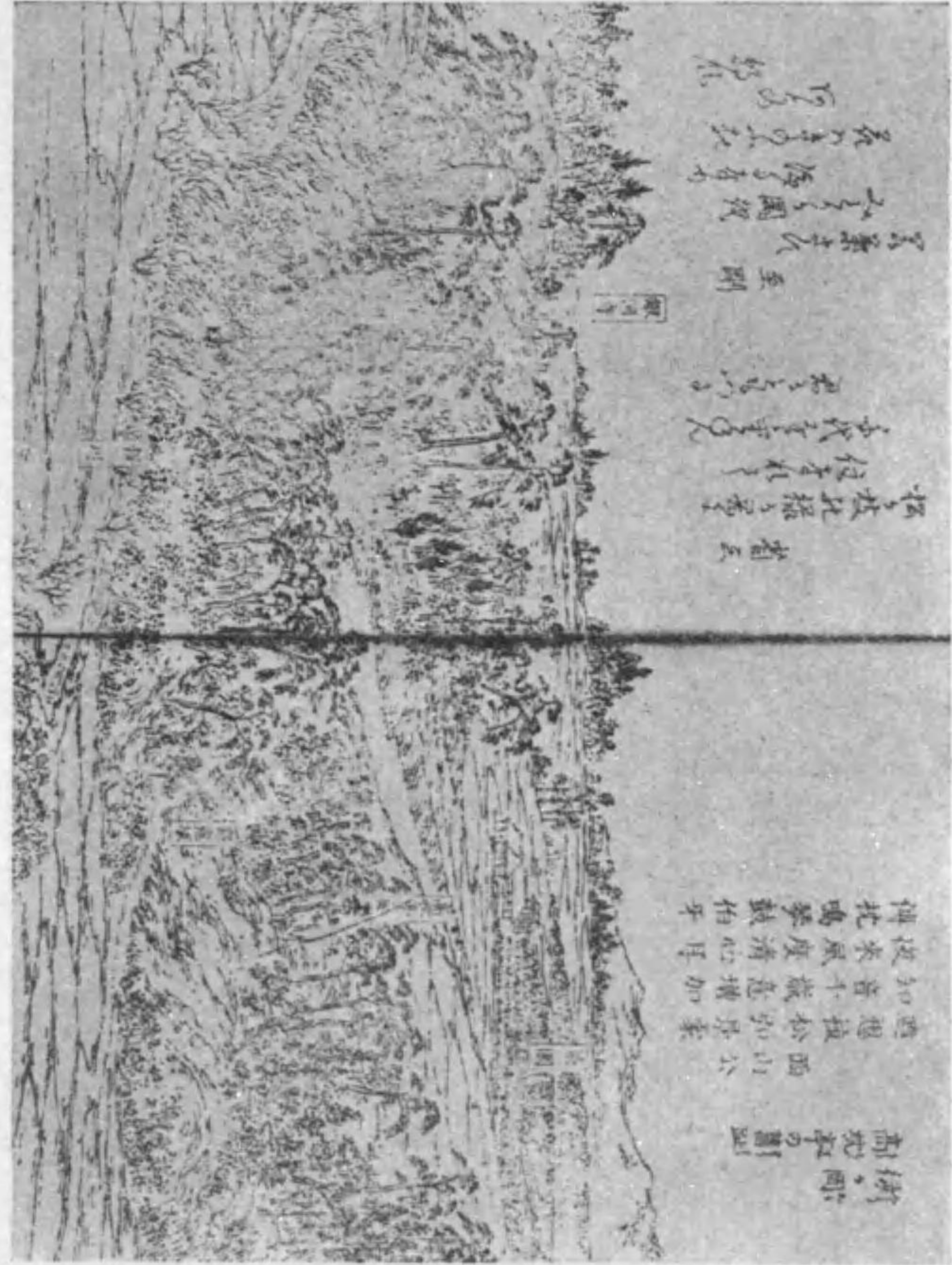
○

立わかれ又逢ふこともしら雲のひまなき雨をなみだとは見よ

傳ふるところによると、光圀が西山莊の建築に着手したのは、元祿四年正月のことである。

この地(太田町)を隠棲のところで定めたのは、その前年で、藩内巡視の折、この地形を見て、その幽邃・閑雅を喜び、且つ一方では、土地の人々に教化を施したいといふ考へもあつたからである。

この太田町の西山附近は、常陸の北部に當り、もと佐竹氏の居城のあつたところで、附近のものは、よく佐竹氏になづいてゐた。そして佐竹氏が、この地から秋田へ轉封して以來、もう八十年にもなるが、尙ほその餘徳が残つて、佐竹氏を慕ふものが往々あつた。それらを手なづけてゆきたいといふのが光圀晩年の望みで、やがてこの地に別莊を作ることになつた。ここに光圀の深い考へが潜んでゐたのである。



義公最初の別荘地緑ヶ岡

便宜の上からいふと、光圀に取つては、水戸城の西方、僅かに半里ばかりの距離にある緑ヶ岡(今の常磐公園と相對した丘地)の方がずっとよかつた。寛文五年、光圀はこゝに別荘を設け、高枕亭をはじめ、君子林・窈窕坂などを作り、度々、學士らをあつめて詩歌の會を開いたのである。

その後、元祿九年になると、此處に手入を加へ、岡のもとを流るゝ櫻川の上流あたりに櫻樹を植ゑ、新しい花見の名所とした。それから程ちかいところにある仙波湖を中心に水戸八景を撰んだ。蓋し緑ヶ岡の眺めは極めてよく、高見村の高臺からは、すぐ筑波山の姿を望むことが出来るのみならず、櫻川の清流と仙波湖の漣とを一眸のうちに收める便宜があつた。さうしたちなみにより、光圀は、水戸八景を撰ぶこととし、(一)神崎寺の晚鐘、(二)梅戸の夕照、(三)柳堤の夜雨、(四)下谷の歸帆、(五)藤柄の晴嵐、(六)七面山の秋月、(七)緑ヶ岡の暮雪、(八)葎田の落雁を數へたのである。かく光圀には、ふさはしい別荘地があり、愛した高枕亭があつたにかゝはらず、水戸から五里離れた太田町の西山といふところを晩年の隠棲地として、さしやかな別荘を建てることにしたのは、主に佐竹氏を慕ふ人々を教化し、

君臣一體の美を全うしたいといふ望みがあつたからだつた。

この事に與つたのは佐々十竹・杉浦彌衛門らで、いよく好地と見定めると、笹本次郎太夫に命じて、地ならしをさせた。然し、こゝに別荘を置くといふことは固く祕密にしたので、平生、光圀に隨從してゐた中村篁溪さへ、多分小さい寺でも建てられるのであらうと思つた位だつた。

光圀が西山に赴いたのは、元祿四年五月十日のことである。これより先、光圀は、元祿三年十一月二十九日、江戸を出發して、水戸に歸住したのであるが、一體、光圀の隠棲は彼の自發的な心から出たのか、それとも幕府の命によつたかといふことについては、説を爲すものがある。傳へるところによると、光圀には、元祿のはじめ頃から隱退の意があつて、時々この事を幕府の老中らに話してゐたが、その中、元祿三年十月十四日、阿部豊後守正秋が上使となつて、光圀をおとづれ隱居すべき臺命を傳へたので、光圀は喜んでこれに従つたといはれる。

そこで十五日、權中納言に昇任されると、光圀は固辭した。が、許されぬので、これを拜

命し、

位山上るはくるし老の身は麓の里ぞすみよかりける

と所懐を詠んだ。これによると、將軍綱吉に對して隱居後の任官を好まなかつたことと思はれる。この事情については後にいひたい。當時、光圀が父の愛を深く示したこととして、傳へられてゐるのは、江戸出發に當り、綱條に置土産として、教訓の意を寓した五言古詩一篇を残した佳話である。

我今年致仕して故郷に歸る。仲冬二十九日夙に江戸の邸を發す。別れに臨んで、詩を賦し、兒九成に遺る。文點を加へず、口に任せて漫にいふ。一笑胡盧せよ。

元祿庚午の冬、跡を遁る東海の濱。

致仕して印綬を解き、縦まに葛天の民となる。

曠漠の野に盤旋し、榮辱の塵を一洗す。

昔首陽の薇に涎し、今吳江の蓴を羹にす。

三十有年來、夙志忽ち伸びんと欲す。

予去る何の處ぞ、再會の辰を知らず。

嗚呼汝欽め哉、國を治むるは必ず仁による。

禍は闔門より始まる。慎んで五倫を亂るなかれ。

朋友に禮儀をつくし、且暮忠純を慮れ。

古へ謂ふ君以て君たらずといへども、臣臣たらずんばあるべからずと。

(2) 西山莊の風趣

光圀は、水戸に歸りつくと、十二月五日(元祿三)藩士一同を城中の大廣間にあつめて、告別演説を行つた。この時、藩士はいづれも緊張した面持であつまり、靜かに姿を正して、ちつと光圀の演説に耳を傾けた。これにむかひ、光圀はかう告げたのである。

「自分は、老來、病のため、兎角、登城することも、心に任せぬところから、過般致仕の願ひを申出て、許された。そして少將(綱條)に家督を命ぜられ、その上、中納言に任ぜられた

のは、恐縮且つ満足の至りぢや。それに今後、諸君と親しく接することが出来るのも喜びの一つである。次にこの三十年來、自分の在任中、不行届が多かつたにかゝはらず、諸君が誠實に勤務してくられたのも深く感謝したい。ついでには、今後、少將に大切に奉公し、善政の實現につとめて貰ひたいと思ふ。それには、温厚に篤實に聖賢の道に志し、自分の功名のために亂を思ふが如きことなく、また血氣の勇にはやることなきやう心してほしい。」

かう光圀は、訓示したが、尙ほ藩士の子たちに向ひ、若い主人を助けるについては、若いものゝ協力を特に要することも告げた。この情理兼ね備へた告別演説は、深く藩士の心を動かし、老若いづれも感激の涙に咽びつゝ、つゝましく退出したのである。

やがて西山の別莊が出来上ると、光圀は五月(元祿四)水戸をあとに、太田町へ向つた。この時、光圀は、柱に所感を書きつけ、

ここもまたかりのやどりをいでわびてなるゝぞつらきわが心かな
と詠んだ。

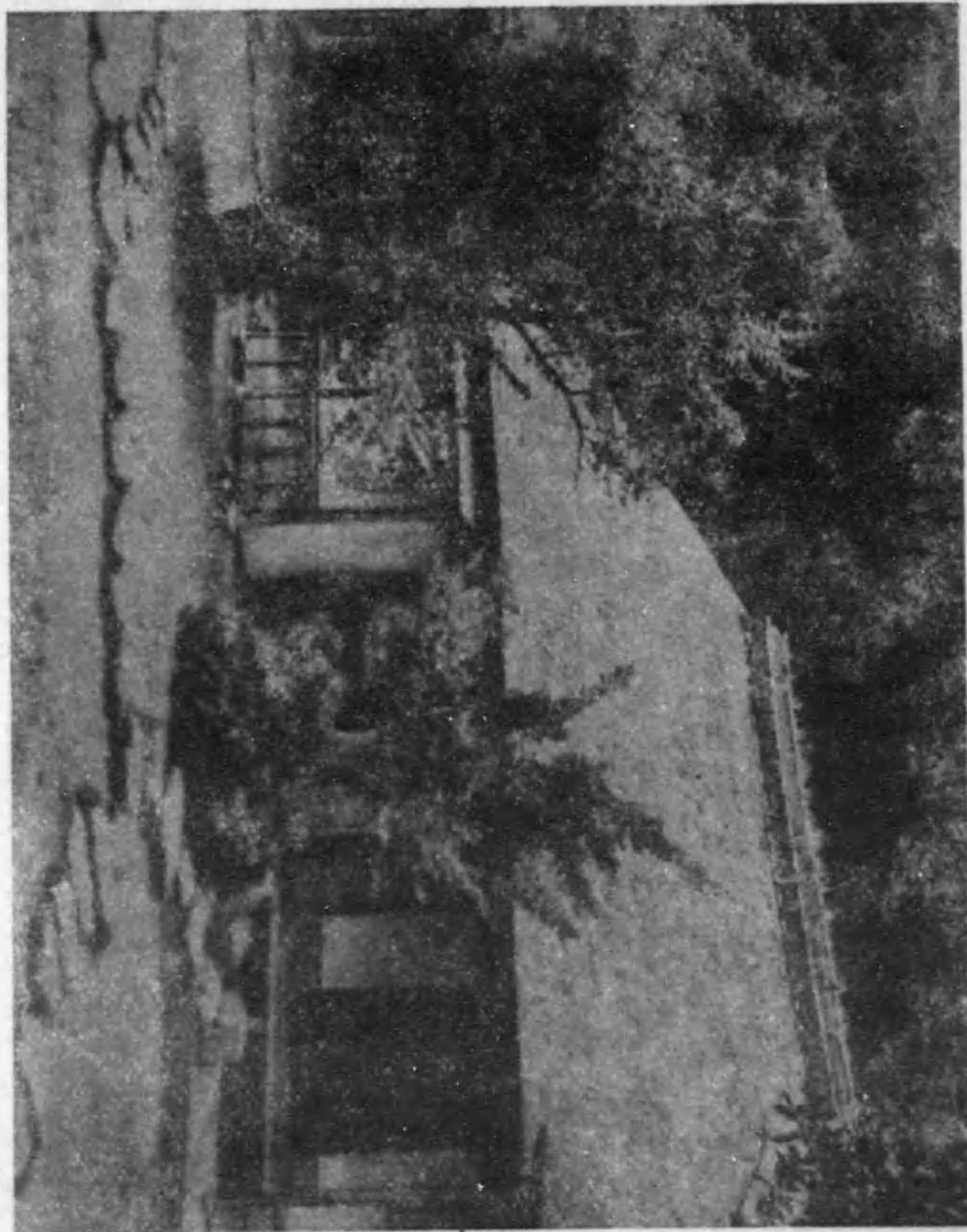
光圀の山莊！ それは、太田町を西に十餘町離れた場所に位置し、山間に斗入したところ

にあつた。正に幽邃・閑雅の仙境にちかい。が、山莊の建て方は極めて質素で竹で編まれた門扉には蔦蘿が這ひまつはり、外に面したところには、一重の竹垣を結ひめぐらし、その他は、山につゞいて、圍ひを設けてなかつた。

家の構造は皆二間足らずの梁を用ゐ、柱は杉の丸太で高八尺五寸、萱葺の屋根には、芝きり草が思ふ儘に生ひ茂り、廊下は板張で、縁に竹を用ゐた。特に光圀の注意によつて、此處のみに見られるのは、座敷に圍を設けぬ上、次の間との隔てをすつかり取り去つたこと、こゝに光圀の客に對する平等な心持、階級のへだてを全く作らぬ精神が現はれてゐた。全體の姿は、どうしても小農の家、樵夫の住家を想はせるほどの質素さである。

が、流石に四邊の風致は立ち優つてゐた。砌の岩根からは、清い泉が迸り出て、その音はいかにも、すが／＼しかつた。そして庭の前には、光圀の考案によつて、心字の池を掘り、屋のうしろにも亦池を作つた。この二つの池には、紅蓮・白蓮の花が、シイズンに伴うて、美しく咲いたのである。

また光圀は、書齋の前に梅・桂・玉蘭などを植ゑ、門の前には四五株の垂柳を配置して、



(書齋の庭)

樵を添へた。それから山莊より太田へ出る道——白坂の百姓家があるあたりには、數百株の桃樹を植え、そのあたりをゆるやかに流れる増井川に一つの柴橋をかけわたして、これを桃源橋と名付けた。いかにも風流の心になつた命名である。

光圀の書齋は僅かに三疊であつた。その書冊を入れる押入も、極めて簡單である。が、彼は、これに満足し、こゝで『大日本史』の監修に當つたのである。彼が讀書・執筆に倦んだとき、彼をなぐさめたのは、鶴・鹿・白鷺等である。

山莊で一番よく光圀に親しんだのは、それらの禽獸だつた。山に放たれてゐた鹿は、光圀に馴れて、庭に入り來り、池にゐた白鷺は、光圀を慕つて、時々、座敷に上つた。鶴も亦光圀によく親しみ、その姿を認めると、元氣よく彼の身邊に飛んで來た。かく山莊では、人も動物も一つになつて、親しい日を送つたのである。

(3) 質素な山莊生活と平民主義

當時、光圀の生活は、以前にくらべて、一層、單純であり、質素であつた。その隨從者は、大森典膳・佐々十竹・井上支桐らを合せて、すべて二十三名である。そして光圀には、別に隱居料といふものがなく、唯實費を綱條から受取ることにした。それは、光圀の考へから出たわけで、隱居料が少いと、人々は綱條のことをかれこれいふであらうし、多いときは、光圀について、何とかいふであらうから、實費といふことに定めたのである。

光圀は、西山莊へ唯多くの書籍を携へて來ただけで、金銀・器物は、全く齎らさなかつた。それほど、彼は恬淡だつた。讀書・執筆・吟詠・晚酌などが光圀の楽しみで、衣食住について簡單・質素を尙んだ。在來、光圀は茶の湯を好んだが、器物の欲が出るといけないといつて、西山莊では、ふつつりやめた。それに以前嗜んだ仕舞・能などもすつかり中止した。正に生活更新である。

西山莊に於ける食事は、野菜料理が主で一汁二菜に限られた。晚酌に用ゐる酒は淡い粗末なもので、晝は用ゐぬこととしてゐたが、雨の日は、時に飲用する折があつた。一體、光圀は酒を愛して、江戸にゐた時代には諸侯や旗下の士を相手に毎日痛飲したが、その酒量に匹

敵するものが殆どなかつたといはれる。どんなに多く飲んでも、光圀は酔つた姿を見せたことが一度もない。が、西山莊へ来てからは、ぐつと酒量を制限した。

當時、光圀の衣服は、古びた絹紬の小袖を用ゐて丸の内に葵といふ文字をつけたのを常紋の代りにつけてゐた。夜著は、うすい絹のもの一枚、うすい絹蒲團一つに限り、他は何も用ゐない。そして光圀の茶縮緬の頭巾は、昔ながらのものをその儘、かむつてゐた。袴も同様古いもので、茶苧の袴に限られた。何か儀式のある折には、道服・指貫を着用し、烏帽子・燕尾をかむることにした。

それから日常の起居についても、成るべく近臣の手を煩はさぬやうに心がけ、水戸へ出かけた時、他へ旅したりしたときには、自分で床をのべ、また始末した。それに正月の門松はこゝでは立てず、すべての儀式は、これを略したが、唯正月十一日の具足祝の式だけはいつも執り行つたのである。

その日常の接客は、開放主義で、神官・僧侶・修験者・農民を心やすく引見し、上下の隔てを撤廢した。西山莊に閨を設けぬのもつまり、彼等をして遠慮させぬやうにしたいといふ

光圀の心やりからである。かうした平民的な態度であるから、住民は、光圀になづき、親しみ、碁の相手となり、酒の友となつたものも往々あつた。

當時、光圀の生活は、のび／＼したもので四季をり／＼の風景を楽しみ、詩歌に興を遣り、附近を散歩して農民と語るといつた工合で、そのつれ／＼を慰めるのは讀書だつた。歌舞の類は全くやめ、唯謡だけを續けたほかに、吟詠も最後まで、清い娛樂の一つにした。かうした自由な生活、拘束されない生活のうちにあつても、禮儀は正しく、小姓頭以上のものが來ると、必ず袴を着けてこれに接し、些の情容がなかつた。

かく光圀は、西山莊の生活に満足して、江戸へ出たいといふことは、日夜、近臣と心やすく話す折も、一度も申し出でなかつた。或るものは、一度位、江戸へ出られた方が氣分が變つてよいと勧めたが、光圀は、これを用ゐようとしなない。

「隠居した以上、江戸へ出るのは、身分にふさはしうない。自然、召出されたならば格別、自分から進んで出府しようとは一向に思はぬ。」

と光圀はいつた。西山の一隠居！ 光圀はかうした謙虚な、淡々たる心持でゐたのである。

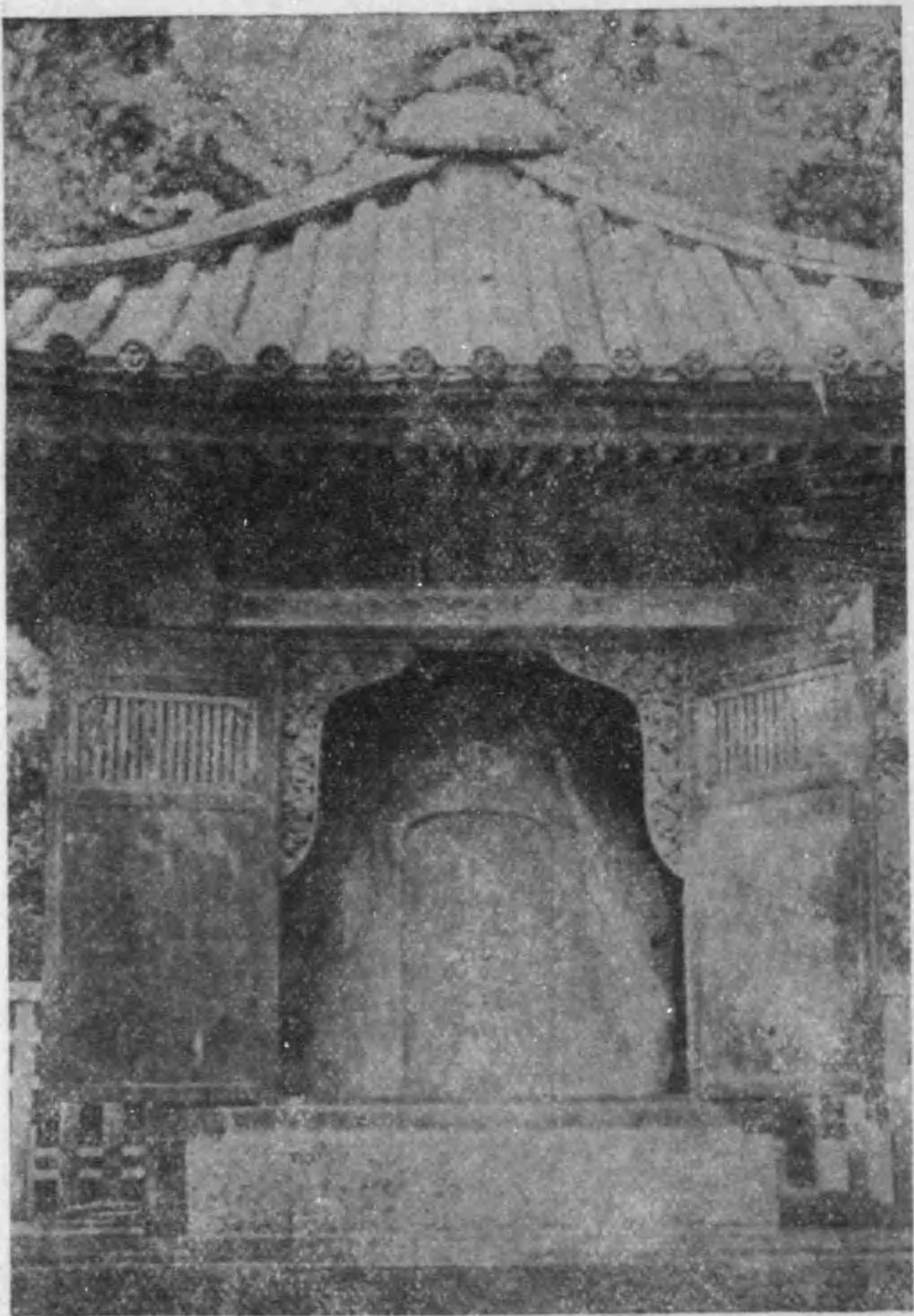
従つて、散歩や旅行の際、向うから来る人を止めさせ、避けさせるのを絶対に嫌つた。

「世上のものは、その身分の高い、低いにかゝはらず、何か用事を持つてゐる以上、無用のことをさせたくない。現在、自分は一閑人で、何の用もない身ぢや。それが往還の人を自分のために止めさせるのは、無意義である。」

かう光圀はいつた。

光圀は、ここに來てから、雅號を西山隱士または西山樵夫とし、元祿四年十二月、その壽藏碑を瑞龍山に建て、題して、梅里先生の墓といつた。梅里といふのは、支那人吳の泰伯——賢人といはれた人——の墓所のある地名で、光圀は平生、泰伯の高風に共鳴したから、かう命名したのである。

その壽藏碑に彫りつけられた自傳(梅里先生碑陰銘)は、光圀一代の名文として、世に傳へられてゐるが、死生を超越し、悲喜を超越した高い心境が、その文字の上に現はれてゐた。そして朗かな、洒脫な氣分で、日々これ好日とする趣も亦そこに流れ出てゐる。(この事については別に述べる。)



壽 藏 碑

(4) その後の史業と光圀の謙虚な心

西山莊に於ける光圀については、記すべき挿話が少くない。當時、郡奉行のうちに、硬骨をもつて知られた鷲尾覺之丞といふものがゐた。彼は自分が正しいと信ずることは、すぐ實行して、誰にも遠慮しなかつた。ところが、或日、一人の百姓が役所へ来て、覺之丞に西山公の御許しを得たから、帯刀御免の特典に浴したいと願つた。

「何を申すか、僭越ものめ。」

覺之丞は大喝した。百姓は、ひどく恐れて、光圀との交渉を告白した。それによると彼は平生、光圀の碁の相手を勤めてゐたので、或時光圀に向ひ、帯刀御免のことを願ひ出た。それは、光圀の心やすい態度に不知不識思ひあがるやうになつたからである。が、光圀は、これを拒まなかつた。

「それは、容易いことぢや。では、自分が御身に帯刀いたさせたいといつてゐる由を郡奉行

まで申し出るがよい。」

かう光圀はいつた。これを聞くと、百姓は、ひどく喜び、すぐ覺之丞を訪うたのである。が、覺之丞は、たとひ光圀の命であるからといつて、許すことをしない。そこで覺之丞は百姓に向ひ、

「一體、さういふことを汝如きものに傳言さるゝ筈はない。若しその必要があらば、その筋から御命令があるに違ひないのぢや。どうも汝のいふところは嘘と見える。不都合ものめ、今すぐ縛りあげるぞ。」

といつたので、百姓は驚いて逃げ去つた。それから光圀にあひ、右の話をすると、

「どうも郡奉行がさういふ以上、致し方がない。あきらめるのが肝要ぢや。」

と光圀は、やさしく諭した。そして正しく、覺之丞の硬骨・剛直なのを認めたのである。覺之丞は光圀の許したことを一度取消した場合もあつた。やはり、光圀の相手を勤めてゐた百姓が、操人形の興行を光圀に願ひ出て、許しを受けたので、早速、興行した。それを見たのは、巡視中の覺之丞である。

「この興行は、役所へ願ひ出たものでなからう。すぐ中止してしまへ。」

かう覺之丞は怒鳴りつけた。そこで百姓は、光圀の許しを得たことを話すと、それは正式のことでない、覺之丞は固く斥けた。これには百姓も、がっかりして光圀を訪ひ、右の事情を話すと、光圀は百姓に向ひ、

「自分が許可しても、役所で許さぬとあれば致し方がない。國法の前には頭をさげるばかりぢや。」

と諭した。かく光圀は、西山の一隱居として、無役である現在の身を思ひ、藩主綱條の威望を重からしめるために、郡奉行に對しても、謙遜し、我意をとほすことがなかつた。

光圀は百姓を愛したが、國法を重んじた。この事は、光圀が平生深く心がけたところで、當時、彼は山莊近くの田をいくらか所有し、自ら耕作に當つた。この年貢は、田の所有主に贈つた禮物の代を差引いて必ず納めることを實行した。藩主の父である以上、年貢を納めなくても、済むのであつたが、光圀はやはり、國法を重んずる上から、收納を怠らなかつた。

一方、光圀は西山莊へ來てから、『大日本史』の仕事を進めることにも、以前より一層の努

力をした。この心持は、綱條にもよく分つたので、元祿四年二月から、彰考館では、史官に命じて、毎日出勤を勵行せしめ、夕刻になると、慰勞のつもりで一同に酒食を出した。この事が光圀の耳に入ると、ひどく喜んだが、

「中將（綱條）が自分の心持をよく知つて史業の進捗に鋭意してくれらるゝのは眞に嬉しい。然し餘り勵精させると、疲れも出よう、病にかゝるものもあらうから毎月十日間の休暇を與へるが宜い。一體『大日本史』の仕事は、疎漏を避けて、慎重を期しなければならぬから、十分落著いて従事してほし。」

と綱條に申し傳へた。この話を聞いた史臣らは光圀の精神に深く共鳴し、以前よりも、一段の緊張振りを示した。その後（元祿一一）光圀の都合から史館は江戸と水戸の二つに分つこととなり、水戸ではこれを城内の舊殿に置いて、『大日本史』紀傳の編輯に専任したが、江戸では、その副事業ともいふべき方面を擔當し、『釋萬葉集』『神道集成』『參考源平盛衰記』などの編述に當つたのである。

かく光圀が西山莊へ來てからは、修史事業の中心が、全く水戸に移つた。そして時々西山

莊で編輯會議が開かれ、史業のことで水戸・西山との間を往復する史臣の度数も殖えた。それが土地柄不便だつたにちがひないが、光圀の生活の上に於ける單調さは、これがために破られ、またその氣分を引立てる上に一つの力ともなつた。晩年の一番大きい仕事！それは光圀に取つて、最もよき刺戟だつたのである。明けても暮れても、光圀の心は、只管『大日本史』の上にかゝつてゐたのだ。

(5) 雪月花に興じた風流生活

風流な生活！ それは西山莊の主人、光圀を彩る一つであつた。こゝに水戸城外の神崎に住む老茶人、桑屋三夢といふものがゐた。彼は獨身で、齡八十を過ぎてゐたが、仲々健かたで、僅か膝を容れるばかりの藁小屋にちかい家に住みながら、悠々、茶道を楽しむといふ變り物である。

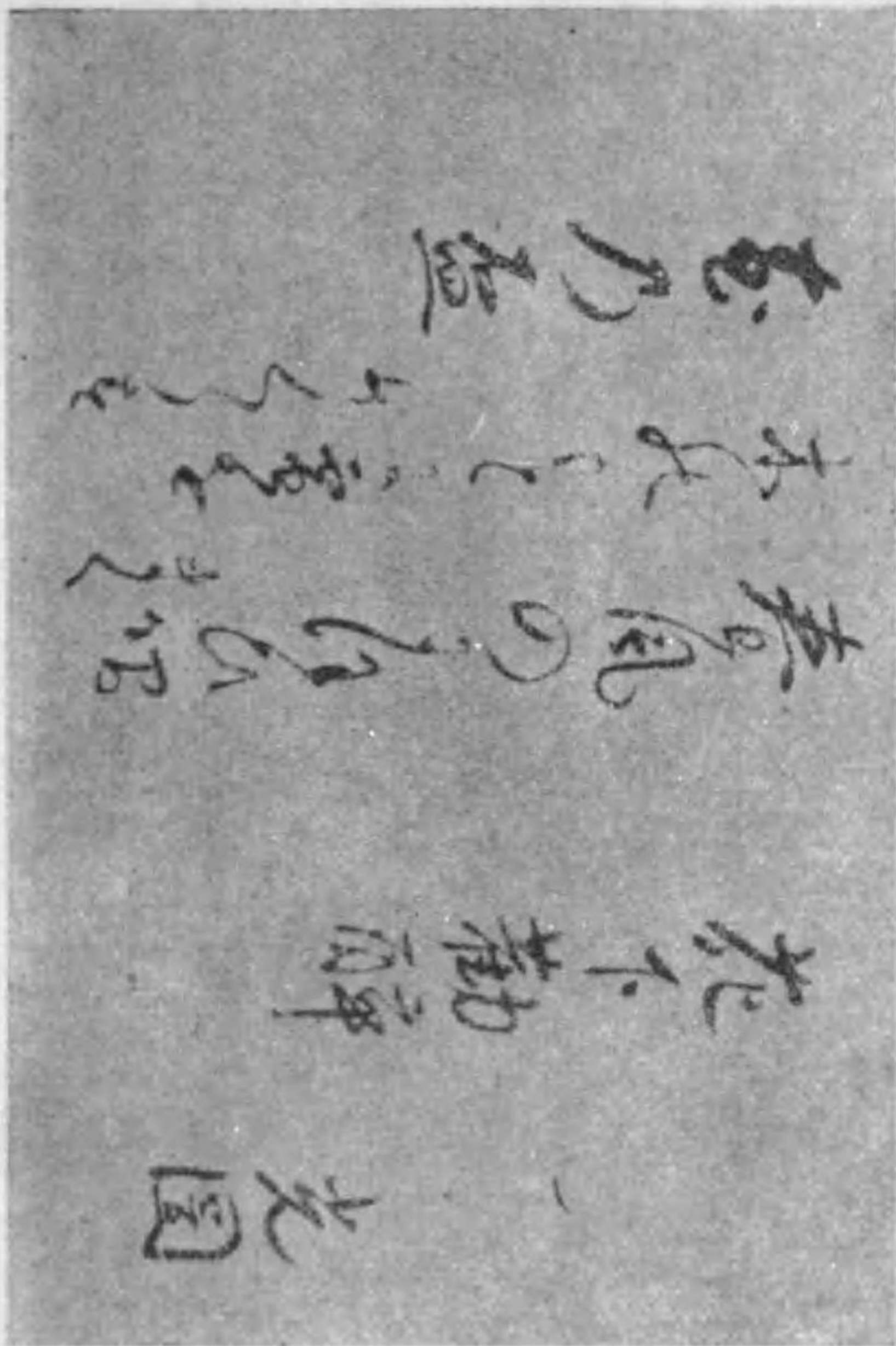
光圀は、かねてこの三夢のことを聞いて、その清淡な生活に心を動かしたので、或日近臣

をつれて、突然、三夢を訪うた。三夢はひどく喜び、座に光圀を請じたが、さて膝を容れるばかりの家で、近臣二三人が光圀と共に這入れただけで、他は外に待つ有様だつた。

當時、三夢は足を痛めて、正座することが出来ぬので、ひどく恐縮したが、光圀は坐りよいやうにせよと命じ、三夢をいたはつた。三夢は、深く光圀の情ある言葉に感激し、謹しんで、茶を立て、進めた。そのとき、光圀は茶入のめぐりに雲のやうなものが浮び出てゐるのを興あり氣に眺め、何か名があるかと問ふと、まだ名がない旨を答へたので、光圀は咄嗟に横雲と命名し、機嫌よく三夢と語つて、庵を出た。後、その禮に光圀は、立派なあじや釜を與へると、三夢は押し戴いて、永久の家寶としたといはれる。

光圀の楽しみは觀月・花見・雪見などにあつた。或年の冬、水戸へ出かけて、一日二日逗留してゐると、雪が降り出したので、西山の雪は、さぞ見物であらうと光圀は、頻りに興を催し、夕刻ではあつたが、突然、西山莊へ歸る旨を近臣に傳へ、笠をかむり、草鞋をはいて、すた／＼歩き出した。

途中、到るところの雪景色を賞しつゝ、三里餘の道を突破して漸く額田（久慈郡、西山へ



二里のところ)に著いた。後から追いついた近臣らも、こゝで全部捕ひ、焚火しながら、光圀から酒を賜つた。光圀も白銀につままれた山川をちつと眺めながら、快く酒杯をあげ、全身が温まるのを待つて、額田を出發し、夜あけ前に、西山莊に辿り着き、雪をかむつた庭の前に、そゞろ詩興の湧くのを喜んだのである。

また或時、光圀は、小幡(茨城郡)の有名な桜花を見るため、春雨がしとく降るものとはず、俄かに西山莊を出た。その際、光圀は、小幡が可なりに遠いのをも氣にしないで、駕籠も雇はず、唯笠をかむつて、元氣よく雨中の道を歩いていった。

目ざす地にやつと著いたが、雨はまだ仲々やまぬ。例の桜の花は満開で、雨にぬれつゝ美しい色を浮べてゐた。これを肴に、光圀は近臣を相手に一酌し、終日、詩歌を作りつゝ風流三昧の時をすごしたのである。

水戸には、もう一つ變つた櫻の名所があつた。それは、八牟知山(茨城郡)の老樹で、好事のものは、不便を忍びながら、こゝを訪うた。光圀も或年の春、此處の桜花のことを想ひ出し、俄かにその山中に分け入つて、有名な二本の老櫻が、はつと開花してゐるのを、すぐれ

た眺めに思つた。そこでこれに一本櫻・二本櫻の名を與へて歸つたのである。それ以來、この老櫻は、ひどく有名になり、年々花見の客が雑沓するやうになつたといはれる。

花見のほかに光圀が年々、喜んだのは、那珂湊の觀月だつた。こゝは太平洋の怒濤を前にして、眼界がひろく、月を見るには、絶好の場所である。光圀は或時、こゝで初秋（七月十五夜）の月を見て、ひどく氣に入つてしまつた。そこで光圀は近臣に向ひ、

「八月十五夜の月もよいが、七月十五夜の月の趣も仲々捨てがたい。昔、蘇東坡が赤壁といふところで、舟を浮べて觀月の興を恣にしたのも亦七月十五夜のことだ。それ故、今後中秋、晩秋の月と共に、この初秋の月をめぐることにしたい。」

といつた。かうして光圀は、その夜、月光を浴びつゝ、詩歌の會を開き、夜更けるまで月の姿を仰いだ。

光圀の風流心は、父頼房（威公）が作つた後樂園の上にも現はれ、光圀は、園の入口に支那風の門を立て、その門額には、朱舜水が後樂園と書いた三字を彫つて掲げた。そして誰でも、こゝを見物したいものには入園を許し、四季をり／＼の風流をつくさせたのである。ま

た水戸の仙波湖畔の堤に楊柳を植えて景致を添へ、支那の西湖の蘇堤になぞらへたのも、光圀の風流心からであつた。

光圀は又、西山莊附近の士民を教化することにとり、太田町の馬場御殿に、一ヶ月毎に三回、漢文學の講座を開いた。それは、元祿十年十月からのことで、講師には鶴飼稱齋・青野栗居・酒泉竹軒の三人が任命され、「大學」「三體詩」などを講じた。後、講談所を馬場金剛院へ移し、いつも農民たちの來聽を促したのである。水戸でも寛文十二年以來、彰考館で漢文學の講座を開いて、森徹塾らが出講したが、その聴講者は藩士に限られてゐた。光圀が大衆のために、講座を開いたのは、西山莊方面だけのことで、こゝに光圀の配慮が窺へるのである。

かく西山莊の生活は、平和そのものだつた。ところが、茲にこの平和境にゐる光圀の心にはげしい衝撃を與へた事件が、元祿七年に突如として起つた。それは次に記さう。

第一〇 光圀の終焉と藤井紋太夫誅戮

(一) 藤井紋太夫の野望

光圀亂心！

さういふ噂が不圖、幕閣の内部に傳へられた。この中傷をなすために運動した人物は、誰であるか、それは、まだはつきりしなかつたが、この噂に眉をひそめたのは、平生、光圀と餘り仲のよくない將軍綱吉であつた。

一體、綱吉が將軍となつたのは、光圀の盡力によるところが多かつた。従つて、綱吉は光圀と仲よくしなければならぬにかゝはらず、事實は、これに反してゐた。それは綱吉が、ともすると、私心を満足させようとするのとは異なり、光圀はあくまで公正の心、公正の行ひを重んじて、これに反對したからである。

光圀と綱吉との感情衝突は、先づ世子問題を中心として起つた。蓋し綱吉が將軍となることが出来たのは、兄綱重(甲府侯)が病死したからでもある。それ故義理の上から考へると、亡兄の子、綱豊を世子とするのが至當と考へられ、光圀は、この意見を抱いてゐた。

ところが、綱吉は綱豊に對して冷かで、これを世嗣とする心は微塵もなく、自分の子、徳松を世子とする決心だつた。それについて、三家の意見を徵すると、義理固い光圀は、綱豊を世子とし、その次に徳松に及ぼすのが至當だとした。が、綱吉はこれを用ゐない。

その後、徳松が病歿すると、綱吉は、その女孀に當る紀州侯綱教を世子の候補とした旨を三家に洩したところが、光圀は固く反對し、これを西城に迎へることの非を指摘した。こんな風に、世子問題をめぐつて、光圀と綱吉の意見は全く背馳したのである。

事は唯それに留まらなかつた。貞享中、江戸名物の神田祭が催されたとき、將軍の生母、桂昌院がこれを見物することになつた。それにつき、當局の有司は、三家及び諸侯に向ひ、桂昌院のために雑沓を防ぐ趣旨から還り路は迂回されたいと希望した。ところが、光圀は、これを聞いて不當とし、そんなことのためわざ／＼まはり道をする必要はないといつて、設

けられた竹矢來を破り、堂々、通行したのである。これも將軍綱吉にとつては不快な一つに思はれてゐた。

それに光圀は、綱吉の過度な愛犬癖についても、最初から固く反對した。それは全く綱吉及びその生母の迷信から出たのである。當時、綱吉はその愛兒徳松を五歳のときに失ひ、烈しい悲しみに沈みつゝ、更に世子の出生を切に望み、平生、尊信した知足院の僧隆光にこれ話を話すと、隆光は徳松の死を前世における殺生の祟りと爲し、今後、世子の出生を望むについては、生類を憐む必要がある旨を語つた。且つ綱吉の生年は戌であるから、愛犬の必要を頻りに力説した。

そのため、綱吉は、犬を殺すものを死罪となすに決し、勵行した。これに對して、光圀は固く反對し、人に害を加へる犬は、これを殺すのが至當だといふことを老中に告げ、且つ綱吉の反省を促すため、故らに狂犬を殺して、この旨、届け出た。この事も綱吉に取つては、不快の種となつたのである。

さうした折柄、光圀亂心といふことを幕閣に諷したものがあつた。それは後に、光圀の寵

臣、藤井紋太夫の所爲だと分つたのである。紋太夫は何故、かうした反噬を光圀に試みたか、それは一に彼の野望にもとづいたのである。事は、頼房の時代になるが、當時、藤井といふ老女がゐた。若狭小濱の生れで、曾て禁庭に仕へ、諸種の儀式に通じてゐるといふところから、彼女を水戸における大奥に採用した。時に彼女は、熱心に儀式傳授に力を入れ、その功勞少くなくないのでこれに酬ゆるため、その一族紋太夫を起用し、藤井の姓をつがせた。

紋太夫は、才幹に富み、表面、いかにも質朴らしく見えた。之がため、光圀は、特に愛して、年寄職に進ませ、祿八百石を與へて嫡孫菊千代の傳としたのである。かく出世するにつけ、紋太夫の望みは大きくなつた。が、光圀がゐる以上、彼の野望を満足させることは、全く不可能だつた。

そこで紋太夫は、光圀を陥れて、妨害物を除かうと考へ、巧みに綱吉の寵臣、柳澤吉保に取り入つた。そして吉保の息、吉里の歡心をも買ふにつとめ、一美女を自己の姪といつてその妾に進めた。さうした關係から、吉里の妾をして、光圀亂心のことを、吉里に誣告させたのである。吉里は、これを眞實と考へ、阿部正武に話すと、正武は極力反對して、はげしい

争ひを起したことをさへあつた。この事、いつか桂昌院の耳に入り、光圀亂心のこと、ほゞ網吉の信するところとなつた。

そこで光圀召喚となり、元祿七年三月、表面、網吉が對面を希望するといふ口實で、光圀の出府を俄かに促した。この事を光圀がどう思つたか、記録の上には、何とも傳へられてをらぬが、決してよい意味にとらなかつたらうと考へられる。光圀が退隱後やつと中納言になつたことも、網吉の冷遇によることであり、光圀の退隱も亦ある方面から思ふと、網吉を目前の上の瘡のやうに考へて、阿部正秋に旨を傳へ、これを促し立てたとも見える。

さうした経緯があるから、光圀も腹のうちではほゞ網吉の意圖を察したにちがひない。そこで彼は、笠間路を経て、餘り目たぬやうに江戸に出た。そして光圀が登城したのは三月のことである。そこで、網吉から出しぬけに『大學』を講述すべき命を受けた。光圀は、成程とらなづいたにちがひない。そこで彼は、

「私は在來講釋した經驗を持ちませんが、曾て讀んだことがありますから、その通り申上げます。」

といひ、『大學』の三綱領——明德、止於至善、新民について講義し、周の文王が至善に止る意義を全うしたことに及び、暗に網吉の脱線政治を諷した。これで御前は事なく済んだのである。

(2) 紋太夫を手討ちにして神色自若

が、光圀は、一切の真相に想ひ到つて、こゝに藤井紋太夫の奸計を糺弾しないわけにゆかなかつた。在來光圀は、特に紋太夫を愛し、引立てた。ところが紋太夫は、却つて増長し、光圀の立場を不利に導いて、これを倒さうと計つた。のみならず、紋太夫の野望は、水戸で勢力を大きくするだけで満足せず、進んで幕府の要路に腰を据ゑようとし、同志多數を作りつゝあることをほゞ光圀は知つた。

そこで光圀は、勢ひ紋太夫をその儘にして置くことが出来なくなつたのである。然し、これを片付けるについて、光圀は誰にも氣付かれぬやう用意し、極めて手際よく、實行したの

である。それは、その年（元祿七）能の催しに託して、紋太夫を手討ちにしたわけで、その時日については、『大學』三綱領を綱吉の前で講じてから、間がないやうに記してゐる書もある。また大分、時日を隔て、その年十一月二十三日に決行したといふ説もある。恐らく、いづれにしても、光圀が豫め、十分に計畫してゐたことは、侍臣井上玄桐の筆記によつて、明かである。

玄桐はこの事につき、はじめから終り迄、實際を見てゐた人で、彼の筆記によると、光圀は、河原書院の鏡の間で藤井紋太夫を手討ちにする五六日前に、あらかじめ能舞臺の樂屋を見たいと玄桐らに告げ、十人ばかりを伴つて、鏡の間を視察した。そして何處へ屏風を引くか、どうそれを折り曲げるかといふことまで詳しく聞いて歸つたのである。これにつき、何のため、そんなことを問はれるのであらうと、玄桐らは不審いぶかしんだといふ。

次に光圀は、どんな能を演ずるかといふことについていろいろ考へ、『千手』を選んだ。ところが、光圀はこれまで、謡の文句をよく忘れるので、文句の多い『千手』は、ふさはしくあるまいといふものもあつたが、光圀は今回は大丈夫といつて、自信がある口振りで、いよ

いよその當日になると、脇は志村金五郎が勤め、重衡には、装束係長兵衛の子がなつた。

この日の光圀は、少しも絶句しなかつた。すべて工合よく演じて、十分落着きが見えた。却つて重衡になつたものが文句を忘れて、光圀の補ひを受けた位である。やがて喝采のうちに演じると、光圀は鏡の間へゆき、装束をぬいで、常の服になり、休憩した。

丁度、中入の時刻で、客には、酒食を出し、一同打ちくつろいでゐるうちに、光圀は、いよく計畫を進めてゆくことになつた。この時、光圀は、堀田宮内・寺島彦三郎らを相手に一酌するところへ、中村篁溪・板垣宗懺らも伺候したが、光圀はいづれあとでゆつくり皆と飲まうといつて、事に託し、一同を他へ立ち去るやうにした。

その時分、多くの來客の食事はほゞ終つてゐた。光圀は、井上玄桐に命じて、紋太夫に、「一寸話したいことがあるから、用事がなければ、來て貰ひたい。若し用事があれば來るに及ばぬ。」

といふ旨を傳へさせた。丁度、その際、紋太夫は食事を終り、楊枝をつかひながら、鈴木といふものと話してゐるところだつたが、光圀の命を聞き、機嫌よく鏡の間に赴いた。今、

すぐ手討ちにされるであらうとは、夢にも思はぬ様子だつたのである。

やがて光圀は、紋太夫と相對して、二三問答する程もなく、つと彼に近付いて、その首筋を捉へて、膝下におさへ口元を強く膝で押して聲立てぬやうにした後、法城寺正弘の名刀を手に、紋太夫の左右の缺盆おぼろを一刀づつ刺したのである。最初、紋太夫は逃げようとしたが、光圀の強い力におされてどうすることも出来ず、間もなく絶命した。その際、光圀は、紋太夫の衣服で刀の小口を押へながら、工合よく抜いたので、一滴の血も室を汚さずに済んだ。

當時、鏡の間と能の觀覽所とは、二三尺の路地で隔てられてゐたにかゝはらず、誰もかうした活劇が演ぜられたのを知つたものがなかつた。皆終りまで靜かに見て歸つたのである。

この時、鏡の間に於ける光圀は、座中に敷いた毛氈を紋太夫の身に打ちかけ、目付、用人ら呼び出して、當座の口論のため、紋太夫を手討ちにしたことを告げた。その顔色は少しも平生に變らず、後に残る觀客のためにも、いろ／＼親切な細かい注意をして、悠々歸路に就いた。

事件は、追々後になつて、家中に知れた。これを聞いたものゝ中には、紋太夫などを處置

されるについて、御手を煩はされることはなく、自分らに仰せ付け下さらば宜いといふのに光圀は、打ちうなづき、

「自分も最初は、さう思つたが、若しさうすると、紋太夫を斬つたものも切腹せねばなるまい。それでは、立派な武士を一人失ふことになるから手討ちにした。」

と語つた。

紋太夫の罪惡が知れると、その妻子をも死刑に處すべきであるといふ説が藩内に起つた。

が、光圀は、彼等のために命乞ひをして、これを許し、藤田將監のもとに預けた。また藤井に加擔した同志二百名の存在も、連判狀の入手と共に分つたが、光圀はこれを焼きすて、一切、他を許した。これがため何の騒ぎもなく、この事件は落着いたのである。

(3) 死の前に悠如たる光圀

かく元氣であつた光圀も、元祿十二年冬頃から兎角、氣分がすぐれぬやうになつた。氣力

は、平生と變らなかつたが、胃癌のため、胃腸痛み、漸次食慾減退の氣味があつた。曾て六十
九歳に村松の競馬祭を見て興じ、七十一歳に那珂川に鮭を漁して近臣に頒つたほどであつた
のが、七十二歳(元祿一二)に癌のため憔悴しようとは誰も想ひかけなかつたのである。

翌十三年初春になると、不思議に西山の嶺にあつた大黒松といふ老松が急に枯れ、また仙
波湖の蓮が何のためか、一莖をも生じないので、人々は何かの凶兆と見たが、後には、それ
が光圀の薨去を示す前兆であつたらうと思ひ當つた。この年には、光圀の痼疾は、去年より
も悪化し、晩春初夏の頃に及ぶと、食慾殆どなくなり、疲労も亦加はつた。この事が將軍綱
吉の耳に入ると、深くこれを憂ひ、綱條も亦胸を痛めた。この時、江戸から奥山立庵が水戸
に下向し、一ヶ月ばかり滞在、熱心に診療した。

その後、水戸にゐる醫師らが手厚い治療を加へたが、一向はかゝしくなかつた。やがて
十月十二日に至ると、急に重態に陥つた。光圀は、その年の夏の頃から最早、全快し難いと
覺悟し、晩夏、不如歸の鳴きすぐるを聞くと、

ほととぎす誰もひとりさはびしきにわれをいさなへ死出の山路に

と詠んだ。また八月のはじめ、大聖院の僧が祈禱の札を持参すると、光圀は、その包紙に、

西山やいるさの月のはかなくもしばし宿かる庭の白露

と詠んだのである。これも同じ頃作つた詩に所懐を述べて、

地僻にして人の訪ふなく、筑然獨り天を楽しむ。

愁に挑ぐ燈火の下、病を煎す藥爐の邊。

眠少うして宵の永きを添へ、情虚にして世縁を了す。

曾て駢拇の恨を吞む、何ぞ終焉を促さる。

と詠じた。これによると、光圀が病のため不眠症になやみ、生の意力が次第に減じて來た
様子が分る。然し、天を楽しみ、命に安んじて、あせらず、さわがず、徐ろに世縁を解脱す
る時の至るを待つたのである。

既記したやうに十月十二日は突如、脈も一時絶えたほどで、急報は江戸の綱條を驚かした。
彼は晝夜兼行で、水戸に下向し、看病に當つた。この時、光圀は元氣を取り戻し、顔色もぐ
つとよくなつたので、一同、覺えず愁眉を開いた。折柄、將軍家では、見舞の上使及び醫師

を水戸に特派したことが光圀の耳に入ると、上使を隠宅に迎へるのは、不敬だとして、人々がとめるのも聽かず、馬に跨つて水戸へ赴き、上使に禮をいつた。この時は、杖にすがりながら、城内を歩いたのである。

當時、光圀を診療したのは、幕府の醫官、奥山立庵をはじめ、竹田如庵・長尾全庵らで、光圀は、快くそれらの人々が勧める藥を飲んだ。且つ禁物とされた食物は一切これを避け、養生につとめた。その頃の光圀の心境を安積澹泊は、人に語つてゐるが、これによると、光圀は澹泊に向ひ、

「今度の病氣は到底、助かるまい。然し、それだからといつて、養生を怠らうとは思はぬ。最善をつくす考へぢや。唯この上は天命にまかせるよりほかはない。」

と告げたのである。又井上玄桐の筆記にも、「凡そ人、養生もいらぬ、服藥も詮なしとおもひ切つたるわざをするは勇敢なるやうには聞ゆれども、畢竟生死の上に屈著して力を用ゐたるものなり。公の御心は、生死は常の事なれば、御力を加へらるゝ事もなし。御在世あるべき程は御養生遊ばされて御在世あるべし。御養生驗なくて、御下世ならば、御下世あるべし。」

其の間少しく御心を用ゐらるゝことなく、従容として死に就くといふ御境界なりしと申奉るべきなり。」といつた。

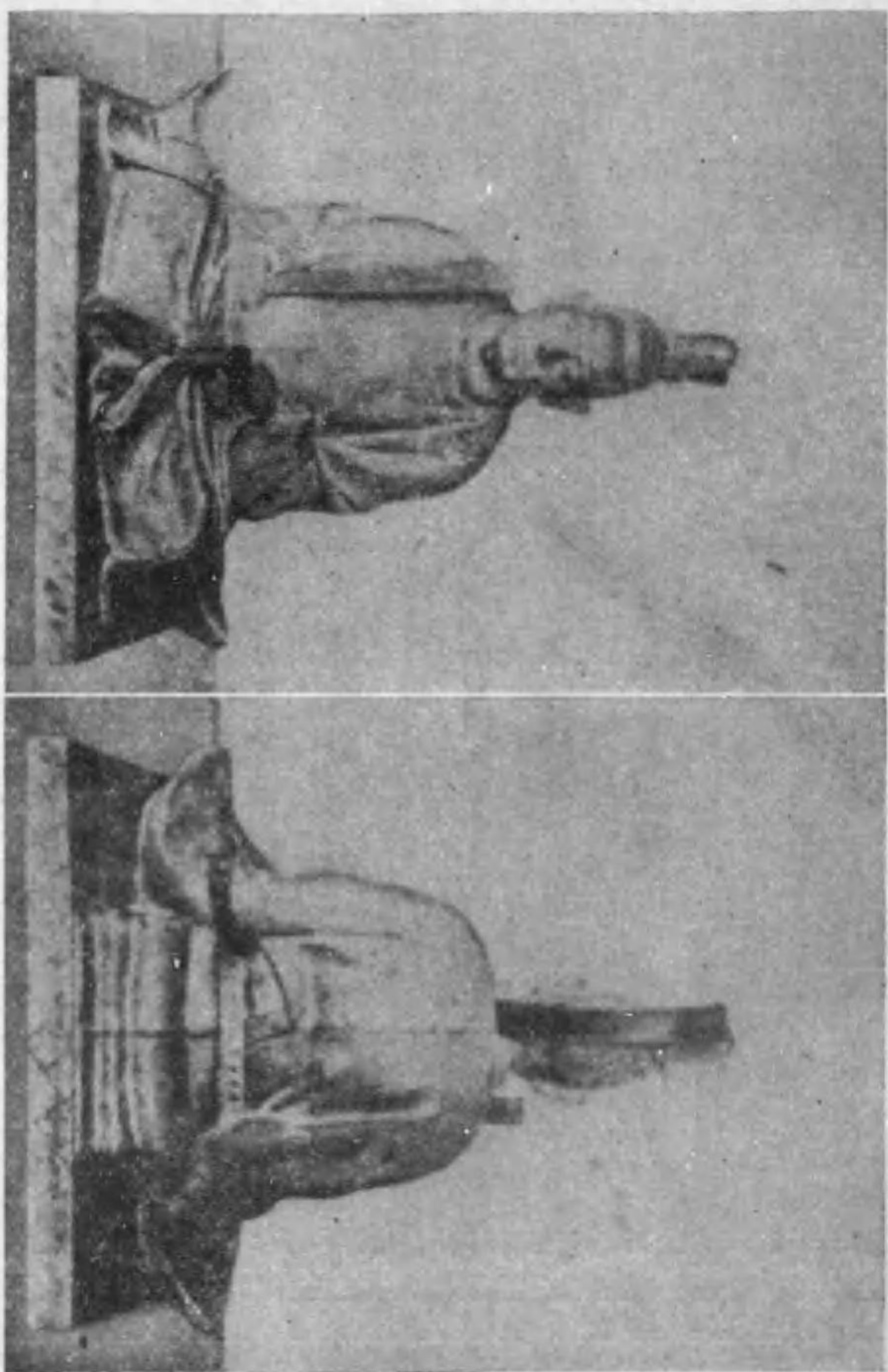
かうした心持であつたから、その後、光圀はその年十二月一日までは、床につかず、夜具を重ねて、それによりかゝり、常と變るところがなかつた。この間、光圀は、史臣・近臣らを相手に、和漢の學を語り、經史について論じ、或は詩歌・連句のことに及びなどして、病苦を忘れたやうだつた。

時は十二月一日のこと、光圀は、綱條に隨從して來た家老、伊藤友親を呼び出し、二時間あまり、内密に政務のことを話し、いろ／＼旨を傳へた。その元氣な様子は少しも以前に變らぬので、友親は、光圀が曾て活潑に振舞つた當時を想ひ起し、落涙數行、この事を人々に語つた。その夜、中村篁溪が見舞に來て、光圀から日光門主へ贈るべき『毘沙門堂記』起草したのを差出し、枕元で光圀の命により、讀みあげると、光圀はちつと聞き入つたが、やがて文字の修正に及び、「光圀普藏」一本、「今新謄寫」の九字を加ふべきよし注意を與へた。その細心さには、篁溪も深く歎服した。

當時、光圀の病床に侍するものは、すべて近臣のみで、女性は全く近付けなかつた。そしてこれらの人々についても酒食を快く給するやうに命じ、その勞を心からいたはつた。かく大分、快方に赴いたやうに見えたが、二日到頭床につき、五日に至ると、夜分に急に床から起き上つて、手を拱きつゝ、少しもくつろがず、靜坐したまふ、楊友清によりかゝり、十二月六日拂曉眠るが如き大往生を遂げた。時に年七十三である。

この薨去に對し、綱條らの悲しみは大きかつた。やがて翌七日、綱條は、中村篁溪らに命じて、謚を義公と定め、十二日、瑞龍山壽藏碑の後方、二十歩のところに儒禮をもつて嚴かに葬つた。

その日の光景を安藤年山は、『手向草』のうちに記して、「さて十二日には、西山より御出棺にて、前駆後騎しめやかに、うちしはぶく音もなく、瑞龍山に一里ばかりのほど、左右の田づら、木の下に、賤の男賤の女など、はひ伏して手を合せ、拜み泣くさまも、ことごと理にこそ。凡そ御封の内は、年久しくこの御惠に潤ひたれば、いつしも同じ心なるらめど、道隔りたる里里は、心にも任せぬなるべし。」といった。西山莊附近の農民らが、いかに光圀の死を心か



義公像 (實田參照)

先考義公尊像其面容

公親命工所刻拜之儼然如存綢條不勝

哀泣敬繕完之安置常陸久慈郡稻

木邑昌教寺希使子孫仰慕

盛德之餘烈

元祿十四年辛巳十一月二十八日

孝子參議 綢條 百拜

ら悼んだか。この文章によつてよく分る。

(4) 全國の光圀哀惜と追慕の涙

光圀の訃報、一度世に傳はると、幕府は七日間の音曲停止を命じ、上下を擧げてこれを惜しみ、悲しまぬものはなかつた。その心持を何人よりも深く痛切にいひ現はしたのは安藤年山の『手向草』である。光圀に仕へた史臣、詩文人は多いが、追懷の情をゆたかに湛へてゐるのは、『手向草』に如くものはない。年山は常に光圀に私淑し、これを敬慕すること、最も深かつた。それは『年山紀聞』に見ても分る。

彼の『手向草』は、光圀薨去の翌年春（元祿一四）に書かれ、多くの歌を挿んで、到るところ、彼の熱涙のあとが見えるばかりである。年山は春の景色に對しても、打ちくつろぐことが出來ず、寂寥を感じた。梅の花を見ても、庭の松を見ても、月を仰いでも、彼は先づ光圀の俤を偲ぶのであつた。

この春のひかりあやなくかきくれて涙も雪も袖にふりそふ

○
いつしかと日數もたつの年くれて見しやかしこき君をこそ思へ

○
數ならぬ垣根のうちに我ぞなく世をうぐひすのまだき初音に

○
なべてよの子の日の小松ひきはへてきみに手向の草とこそ見れ

○
あさかりし春やむかしの袖の香をさながらうつす梅の初花

○
空はなほかすまぬほどの月影も涙くもりて見るよはぞなき

○
年山はかく哀悼の歌を記した後、日夜追懐に袖をぬらしたことに及び、「實にも筑波山茂き御めぐみのかげにかくれ、鹿島の海、ふかきひじりの文まなびたるも、しかしながら此御徳

にて、久しくなれつかふまつりしかば、ことわりにこそ。まして君侯のくれまどはせ給ふ御心のやみは、おもひやり奉るも中々なりや。」といった。

年山が想ひ出を書いたうちに、特に目をひくことが二つ三つある。元祿十三年の春、年山は光圀の命により、宇都山の蔦かつらを西山莊に齎らした。それを光圀は喜んで、垣根に植ゑたのである。この蔦かつらが主人亡き後も西山莊にあるのを見て、年山は泣いた。また光圀の病中、尾張侯が薨じた由を聞くと、光圀は年山に向ひ、

「自分もやがてその後を追うてゆく身だから、眞源の靜かな城で無言説の物語を互にしたいと思うてゐる。」

と語り、次に年山らが尾州侯の辭世のことなどに及んで、いろ／＼話し合ふのを聞き、光圀は、

「辭世の詩歌などは、その人の好みによることで、なくても宜い。また病により、場合により、筆執る暇がなく、辭世に及ぶことの出来ぬこともある。だから辭世がないからといって死の前に勇氣がなかつたとはいひ難い。唯曾子が昔垂訓したやうに正を得て斃るの四字に心

を注ぐべきである。それ故、自分の亡き後も、辭世の有無を氣にする要はない。自分は既に十年の昔、五言古風の詩一篇を詠み、中將殿に残して來た。あれが辭世の言葉ぢや。これ以上何もいふことはなす。」

と諭したのである。これを聞いて、年山らは深く教へらるゝところがあつた。當時、光圀は病中のつれづれを忘れるため、旋頭歌の會を開きたい旨、年山に話したが、到頭、行はれず済んだ。この事が年山の胸にあつたところから、光圀の薨後、彼は光圀のもとで旋頭歌の會を開いた夢を見た。その際、光圀は、深衣・指貫の姿で、一枝の梅花を手にし、「ふる雪にうづもれてしも梅が香はなほ」と吟じたかと思ふと、年山の夢はさめた。年山はこれについて、「龍門原上の土に名をうづまずといふ句の心をよませ給ふにや」といひ、これに次ぐ句を案じて、「幾里の天にあまねく匂ひみつらん」と附けたと記してゐる。

年山のほかに哀悼のおもひを寄せた人々は中々多いが、中にも、常子女王（伏見宮貞致親王御姫）の御歌は尊かつた。

萬代と祈りしことも昔にて定めなき世ぞ更に悲しき

七十や三年の暮を二十日あまり残り多くもおもほゆるかな

これに次いで、舟橋式部少輔經方の「西山黃門のかくれたまふを悼める言葉」は、よく光圀の生涯を正しく表現して、適切なところがあつた。經方は、「この君もとより謀を帷幄の中にめぐらし、勝つことを千里の外に決したまふべきこといふもさらなり。御暇には文つくり、歌など、唐の倭のもぐして長じたまふ。常に雪月に心をいたましめ、これならぬ御遊などまで、御心をやりてせさせたまふ。また政治を正しくしたまふあまり、録寡孤獨のたぐひまで、いたはらぬ隈もなく、いつくしみたまふ。しかのみならず、神社佛閣の絶えたるを興し、輪奐の美をつくし、大方世に稀なるほどの御本性なれば、賤男賤女に至るまで萬歳を祈り奉りしに、かくならせたまへば、物おほゆる人ぞなき。」と讃歎した。

その他、藤原定基・清水谷實業・有馬光近及び家臣らの歌をはじめ、飛鳥井雅豊の出題で公卿たちが詠んだ哀悼歌も多かつた。民間では、江戸で落書したものがあつて、

天が下二つの寶つきはてぬ佐渡の金山水戸の黃門

と詠んだ。かく國寶視せられたのを見ると、光圀が民間に大きい聲望を有したことが想はれる。

(5) 死後の光榮と『大日本史』の進捗

光圀の薨後、彼の偉大な仕事——『大日本史』の編述は、生前の如く、ほど規則正しく續いた。先づ水戸彰考館員の半數を元祿十五年八月、江戸史館に移し、江水提携して、史業の大成に邁進した。

その後、いよいよ『大日本史』の本紀及び列傳の草稿が成つたのは、正徳五年十二月のこととて、光圀薨後十五年目に當る。然しまだ改訂・校正などの上に多くの力を注がねばならなかつた。

かうして文化六年に至り、はじめて本紀・列傳二十六卷の出版を見たが、茲に至るまでいろ／＼の變遷・推移があつた。或時は、校訂と志類(今日の文化史にちがい)とに力を注いだ

ことがあり、また或時は、志類の編述に困難を感じたこともある。或は適當の學者がなないため、『大日本史』の原稿を積んだまゝ閑却した時代もあり、財政上の行詰りから、出版を決行し得ない時もあつた。さうした事情で、光圀の薨後、一百年目にも、まだ『大日本史』の上梓を見ぬといふ有様だつたが、文化六年に漸く緒に就いた。そして文化七年には、出版した二十六卷を朝廷及び幕府に上ることが出来たのである。

これに對し、畏くも、光格天皇は、深く御嘉賞したまひ、關白藤原政熙に聖旨を御傳へなされ、優渥な御言葉を賜つた。この時、はじめて『大日本史』と題すべきことを許され、勅撰に準ずるの光榮に浴した。それは、光圀の薨後百六十五年目のことで、聖旨は「専ら國史に據り、博く群書を考へ、一大部の書を爲す。昭代の美事、堂構の業、勤勞想ふ可し。」との仰せであつた。地下に於ける光圀の滿悦、想ふべきである。

その後、光圀の功勞と忠誠とは、年を逐ふにつれて、天下に認められて來た。畏くも、仁孝天皇は、深く光圀の努力を嘉みせられ、天保三年九月十三日、權大納言從二位を贈りたまひ、光圀の徳業を賞せられた宣命を賜つたのである。この事は、幕府から奏請したのでな

く、すべて叡慮にもとづいた。それ故、京都にゐる所司代は、全くこれを知らなかつたと傳へられてゐる。

次いで明治時代になると、光圀の功勳は、一層、顯彰せらるゝに至つた。明治天皇には、畏くも明治二年十二月十五日、從一位を光圀に追贈したまひ、宣命を賜つて、大義名分の精神を天下に明かにしたことを贊稱あそばされたのである。それから明治十五年十二月には、光圀と齊昭（烈公）とを合せ祀つた常磐神社を別格官幣社とせられ、更に明治三十三年十一月、常陸行幸のとき、勅使を光圀の墓に差し向けたまひ、正一位を追贈せられた。その際、左の詔を賜つたのである。

258

夙ニ皇道ノ隱晦ヲ慨ヒ、深ク武門ノ驕盈ヲ恐レ、名分ヲ明ニシテ志ヲ筆削ニ託シ、正邪ヲ辨シテ意ヲ勸懲ニ致セリ。洵ニ是レ勤王ノ倡首ニシテ、實ニ復古ノ指南タリ。朕適ニ常陸ニ幸シ、追念轉々切ナリ。更ニ正一位ヲ贈リ、以テ朕カ意ヲ昭ニス。

光圀若し靈あらば、必ず感激の涙を流したであらう。彼の枯骨、これがためにうるほひ、彼の墳墓、これがために新しく光を増した。聖恩正に洪大である。

第一 光圀の思想と文藝

(1) 光圀の哲學と世界觀・歴史觀

光圀が好んだのは、文藝・哲學・歴史及び旅行である。彼は旅が好きであつたが、大抵領内を歩き廻つただけで、その他は下野・甲斐の一部及び鎌倉や三浦半島に出かけたに留まつてゐる。『水戸黄門諸國物語』にあるやうな廣範圍に足跡を印したのではない。

259

旅中の一挿話として、光圀の風事を想ひ起させるのは、筑波登山の時のことである。筑波の下り道には、奇巖・怪石がごろ／＼してゐる。胎内くぐり・高天原・出船石・辨慶七戻りなど、いづれも膽をひやさせる。中にも、飛禪定といふところは、第一の難所といはれてゐた。

光圀は、案内者に導かれてこの飛禪定へ來た。そこは、萬丈とも思はれる深い谷を眼下に

控へ、その上を飛び越して、向う側に足をつけるところは大きな岩の上にくつも小さい石が重つてゐて、眞實、足もとが危い。

が、案内者は物なれた態度で、深い谷を見下しながら、軽く向う側へ飛んだ。いかにも、恐ろしいが物馴れた藝當である。この有様に光圀の随従者は眼がくらむやうに覺えた。この時、案内者は、光圀に向ひ、この山内第一の場所を飛び越すことの興味を説いて、これを試みるやう勧めた。

が、光圀は、これをはね付けた。

「自分を見た丈で十分ぢや。行者になる身ではないから、強ひて飛び越す必要はない。」かういつて、すぐ元來た道へぐんぐん引返したのである。危きには近よらぬといふことを考へて、光圀は、自重したのだ。そこに光圀の心持がはつきり浮んでゐる。

旅と同様、光圀は、哲學が好きであつた。彼は佛教・老莊・儒教・神道などを主に研究し、それ／＼要領を把握した。その態度は、光圀自ら「神儒を尊んで神儒を駁し、佛老を崇めて、佛老を排す」といつたやうに、中正の姿を維持し、偏るところがなかつた。光圀は、老佛神

儒の四つをそれ／＼尊敬したが、ゆがめられた老佛、ゆがめられた神儒は、これを好まなかつた。それに、日本精神の立場から、それ／＼公平に批判して、長短を取捨し、是正を加へることに心した。そこに光圀の包容の量が大きいことを示すと共に、何事につけても、これに溺れるやうな行き方をしないのであつた。

一時、光圀は、程朱學に凝つたこともあるが、それに囚はれる傾きは少しもなかつた。また孔子教にも、深く親しんだが、やはりこれに偏る趣を示さない。彼は、これについて、「濂洛の派を抱み、洙泗の春に遇ふ」といつたが、つまり、そのエッセンスと長所とを掴んで、光圀一個の哲學を形造る上に役立てたのである。

かうして思索の力を鍛へた彼は、そこに一個の世界観、宇宙觀を抱いた。ある意味で光圀は、唯心的一元論に立脚してゐた。この事を『常山文集』中の「一の説」「如心の説」において説いた。

一の義たるやあゝ至れるかな。得ていふべからず。推してこれを説けば、則ち道なり。

理なり。無極にして太極、乃ち一のみ。(一の説)

○
夫れ心は天地の至理、天下の達道なり。その天にある、これを命といひ、その人に賦する、これを性といひ、身に主たる、これを心といふ。命や性や心や名は異にして實は一のみ。(如心の説)

多即一、一即多といふことは、哲學するものゝ、考へ至るところで、光圀は、この宇宙における雑多な、そして複雑な諸現象も、つまり、押しつめてゆけば、唯一個の絶對的な宇宙生命に歸一するといふことを認めたのである。その宇宙の根本生命を人間の上にあてはめて見ると、それは心にほかならない。心は一切の至理を具し、あらゆる現象を批判してゆく標準となるものだといふのが光圀の見方で、物質的なものは、この心の力によつて、調整され、統一するのだとした。そこに唯心的一元説が現はれてゐる。

本來、哲學の根本原則といふ上からすると、われ／＼の世界観は、唯心でもなく、唯物でもなく、物心一如である。物に即して物に囚はれず、心に即して心に囚はれず、この二つを調和、統制してゆくのが正しい。然し、光圀の時代には、唯心的な傾きが相當、是認せられ

てゐたから、光圀も亦さうした潮流の中に起つたのであらう。

かういふ風に光圀には、一個の世界観があつたから、こゝから次第に發展して、彼一流の歴史觀、彼独自の樂天的人生觀を作りあげた。在來、光圀については、唯大義名分を重んずる人、尊皇主義の人といふだけは、説かれて來たが、それ以外の廣い部分から光圀を考察するのを存外、閉却してゐた氣味がある。

彼の歴史觀は、『春秋』『通鑑綱目』『神皇正統記』などによつて培はれたが、たゞそれを鵜呑みにしたのではない。光圀一流の考へ方で、一個の史觀を築きあげ、水戸史學の一派を創造したのである。

光圀は、壽碑の裏面に彫りつけた自傳(梅里先生碑陰銘)のうちで、「皇統を正閏し、人臣を是非す」といつたが、それは、尊皇の大義を宣揚するため、國史に現はれてゐるいろいろの現象も、問題も、事件も、つまり、尊皇の大義によつて、解釋しなければ、意義をなさぬといふのが光圀の考へである。

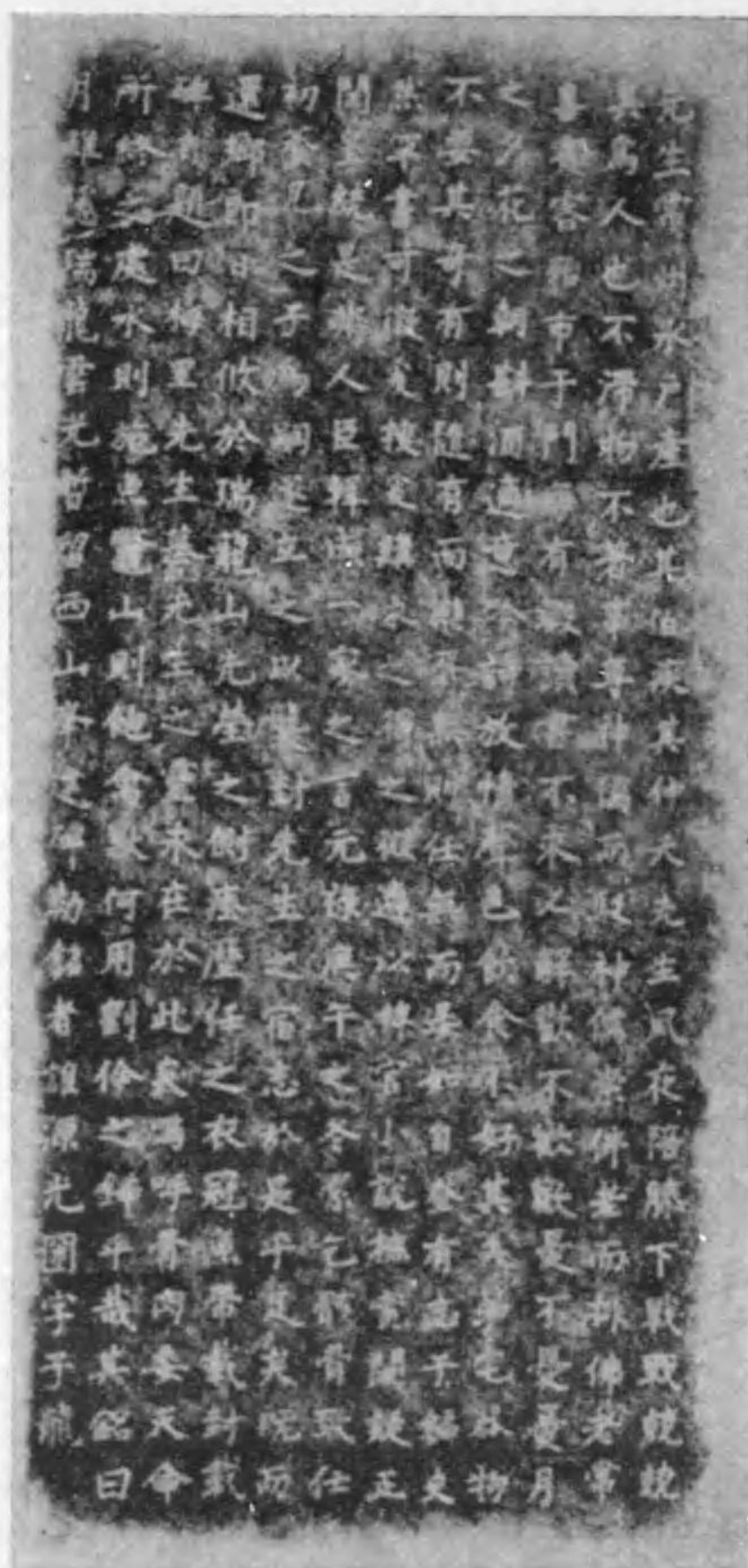
事實、皇統を正閏するといふことは、非常にむづかしい。人臣を是非するのも、容易のこ

とではない。が、眞に日本國體の尊嚴を擁護し、天皇政治の御精神を守り立て、ゆくには、尊皇主義によるのほかに、これによつて、皇統を正閔し、これによつて人臣を是非するならば、妥當の旨を得ると光圀は信じた。

かく光圀は、彼の信ずる史觀により、『大日本史』の内容を統一してゆかうと意圖したのである。この點、主觀的色彩が濃く浮び出てゐるが、一方、彼は史實を明かにしてゆくためには、客觀的記述の方法により、科學的な行き方をした。その史料の選び方、採り方においては、今日の精神科學としての歴史とほゞ同じ行き方をした。この事は既に説いた通りである。そしてそれは、一々、一行乃至數行の記事について出典を明かにしてゐるから、科學的であるといふのではなく、方法學・補助學の上に科學的な正しい行き方をしてゐるのである。

以上の意味で光圀の歴史觀は、現代の新しい史觀に先驅したものと見られる。

光圀は又、年代記風に國史を書いたばかりで甘心せず、文化史風の書き方と内容を備へることに心し、志類のうちで、この役目をはたした。そこには、經濟史・神道史・法制史・軍事史その他各種の文化現象を史的に眺めて、その變遷と歸趨とを明かにした。そしてこの



光圀壽莊碑文 (碑陰銘)

志類の底を流れてゐるのは、皇政復古を熱望するところの力強い思想である。

(2) 悟道に達した樂天哲學

次に光圀の樂天的人生觀は、彼の工夫・省察・鍛鍊により、その知行一致・行學調和の旨により、作りあげられたものと思はれる。安藤年山の『手向草』によると、光圀は、老莊風乃至佛教風の人生觀にも通じ、物象を超越した絶對境に悠遊する心持にも味到してゐたやうである。

然し、老莊風の取りすぎた、すねたやうなところや、小乗佛教の哀世的なところからは、全く離れてゐた。彼は、いろ／＼の哲學に觸れたが、それに對して、自分の體驗といふことを重んじ、心的向上を目がけて、晩年には一種悟りの心境に到達することが出来た。この消息と信念とを光圀は、自傳のうちに、かう書いた。

その人となりや、物に滯らず、事に著せず(中略)常に賓客を喜び、殆ど門に市す。暇あ

る毎に書を読めども、必ずしも解するを求めず。歡んで歌を歡とせず。憂ひて憂を憂とせず。月の夕、花の朝、酒を酌んで適意、詩を吟じて放情。聲食飲食その美を好まず。第宅器物その奇を要せず。有れば有るに隨つて樂胥たり、無ければ則ちなきに任せて晏如たり。光圀の求めるところは、心の満足にあり、内部生活の充實にあつた。そして物質の上では多くを求めない。それは、他に對して、物質上の優遇をなすのを忘れたのではなく、彼自身に處する場合に、物質的には淡泊だつたのである。

宇宙の根本生命を縮圖した正しい心！ この心の充實が光圀の目ざす生活であつた。心の楽しみ、心の澄明、彼は只管にこれを求めてやまなかつた。物質上のことは、彼に取つて、第二義のものにすぎないと考へた。

さういふ心持から、光圀の樂天的な人生觀が生れてゐる。元來、彼は聰明で、事に停滯することを好まなかつた。また彼は、恬淡を喜んで、物に執着するを避けた。即ち光圀は事物について囚はれないで、これを超越するの心境にあることを心がけた。が、さうかといつて、すねるのではない。いつも明朗で、濶達で、快くどんな人にも逢つた。それは、西山莊に於

ける生活を指したので、光圀の平民主義は附近の神官、僧侶、修験者、農民らを山莊に吸ひよせて、毎日客で一杯だったのである。

然し、雨の日など、客のないときには、静かにつれづれを忘れるために讀書した。それは一字一句に拘泥するのではなく、要點を掴むのである。面白いと思ふところを適意に讀むのである。蓋し光圀は、書に讀まれるのではなく、書を活讀したので。これが光圀の清い楽しみの一つであつた。

こゝ迄は、修養次第で、誰でも到達し得るのである。然し、「歡んで歡を歡とせず、憂ひて憂を憂とせず」といふ心的境地になると、仲々至り難い。ともすると、人間は喜びに囚はれ、また悲しみに囚はれる。然し、光圀は、事物のそとに超越する心持をもつたから、喜びにも有頂天にならぬ。悲しみにも浸らぬ。悲喜・憂歡を超越して、これがために心を動かされない心的境地に到達した。それは、悟りの心境である。明徹な心の世界である。

然しながら、光圀は、さうかといつて、取り澄ますやうなことがなかつた。常人と同様、花鳥風月を楽しみ、四季をり／＼の自然を愛した。月が空に澄みわたるのを見るとき、花が

うら／＼かに咲き揃ふのに對するとき、光圀は、これに感興を催して、酒も酌めば、詩も吟じた。かうして、彼の心をのび／＼させるのを、何より快適としたのである。

かく光圀の生活は清淡そのものであつた。そして内部生活の充實を只管求めてゐた。だから、衣食住や聲色については、少しも欲求を持たぬのである。邸宅の美、飲食の美、聲色の美、器物の美、それらは、當時の諸大名がいつも求めてやまぬところであつたが、光圀は、これに執着せず、有無に拘泥しない。日々これ好日である。そこにゆるがぬ樂天性が朗かに光つてゐる。

かゝる思想を持つ晩年の光圀は、一個の哲人といつて宜い。悟道の人といつてもよい。それだから、『大日本史』のやうな國家的文化事業に没頭することが出来たのである。

(3) 和歌に示した光圀の個性と趣味

光圀はまた一個の文藝家としても、光つてゐた。彼はベンネエムを日新齋といひ、また常

山人・率然子・梅里などともいつた。もとより彼は、文藝の士をもつて自らをつたうたのではなく、アマチュアとして、製作するのを楽しみとした。然し、彼の深い教養と高い氣品とは、おのづから彼の詩歌・文章を特色づけたのである。

既にいつた通り、光圀は、學問上、新派の身方だつた。學界の新天地を開いてゆくことに彼は限りない歡びを感じた。ところが、その詩歌・文章は、いづれかといふと、古典的な形式と内容とに満足した形が見える。といつて、保守に囚はれたり、固陋に流れたりしたところは、すこしもない。が、心持の上から、自然、古典的な方へ進んでいつた。

光圀の書いた和漢の文章は、漢文の方において、文字の豊かさと綺麗とをつくしたあたりに、愛誦すべきうま味がある。然し、彼の自傳などのやうに、平易な書き方で、内容に深味のあるものが、より多く、光圀の長所を出してゐる。和文は、既に示した『梅花記』が光圀の才藻をよく現はし、支那の故事を活かし用ゐたあたりに、氣の利いたところがある。

和歌・漢詩は、いづれも、自然味を尙んで、文字に苦心しないといつたやうな、素直な作りに、光圀の個性をよく出してゐる。つまり、技巧を弄したり、綺麗を街つたりしない方によ



父子龍



光源印



山常



住山頑石



父子龍



父子龍



雪朝遠望



光圀



戸水



子龍

義公印章(二) (水戸徳川公爵家藏)

いものがある。彼は隨時隨所に興の湧くにまかせて、和歌・漢詩を作り、多作の方である。それは巧拙如何よりも、光圀自身が楽しむことが出来れば、それで満足だといふ風が見える。いかにも達者に詠みこなす方であるから、時によると、過去の慣習・形式を追うて『古今集』あたりの短所を和歌の上に出した作もある。『萬葉』を十分に知つたにかゝはらず、『萬葉』の感化が餘り見えない。

支那流の詩は漢唐あたりを標準としたと思はれるが、ともすると、文字の方に心をとられて、窮屈な感じのするものもある。これも、精金・美玉を選ぶといふ方でなく、達意を旨とした傾きが見えてゐる。然し、いづれも大名藝以上で、便に光圀が一家をなしたことは、認められる。和歌の作には、四季をり／＼の風景を詠んだものが多く、そのうちに、素直な見方、素直な表現をしたものに佳什がある。時に感想を詠んだもので、現實感に突き入つた特殊の味を帯びた作を往々見受ける。

山深み人は訪ひ來ぬ柴の戸にひとり春知る軒の梅が枝

石そゞぐ音も涼しき山里の笥にあまる庭のやり水

荒磯の岩にくだけて散る月を一つになしてかへる波かな

風の音もまだ秋浅き草の戸は残る暑さも一しほにして

くれなるに散るもみち葉を吹きまきて風も色ある山里の庭

咲き匂ふ花の都はさもあらばあれわが西山の春のあけぼの

見るたびにまた珍しき富士のねはおもがはりする心地こそすれ

たちぬはぬ天津少女の雲の袖つゝみあまりて出づる月かな

○ 老らくの身につむ年はわすられて花待ちえたる春ぞうれしき

○ 老いぬればいつも旅立つ心地してそれとなけれどいそがしきかな

○ ねざめする板間のあらし音冴えてわが世もふくる埋火のもと

○ ながめやる海づら遠く雲はれて波より出づる月のさやけさ

○ 露むすぶ尾花が末を吹く風にさえゆく月の影ぞこぼるる

○ 池水につがはぬ鴛鴦の心をば今ぞわが身の上に知りぬる

この「池水に」とあるのは、光圀が最愛の夫人を喪つたときの作で、沈痛・適切に當時の

心境をよく現はしてゐる。他に西山莊附近の春夏秋冬を詠んだと思はるゝ作に流石によく自然の妙趣に觸れたものが見える。光圀は、西山莊の風光を愛し、その春の曙の美しさは、花の都にも優つて、なつかしいことを自ら歌つた。ひとり、それは春ばかりでなく、山家の味を湛へた夏秋の趣も、冬の姿もすべて奥ゆかしく、塵に汚れぬ眞趣を湛へたのを何よりも好んだのである。かうした消息が、彼の和歌の上にもらされてゐた。

光圀は、山家にひとり春にさきがけた梅の花をよろこび、算の水のすが／＼しさを愛し、紅葉の風に舞ふ山里の幽趣に共鳴した。殊に木枯吹く冬の淋し味のうちに人生を冥想するのを好んだ。「ねざめする板間の風音さえて」の歌は、深い寂寥と哀感とを交錯して獨自の味を湛へてゐる。その他、光圀の老境に入つた時代の實感を詠んだ「老らく」と「老いぬれば」の二首は、いかにも適切で、眞面目に人生を味はふ光圀の心境をさながらに示し、共に味深い作と稱すべきである。

(4) 詩の上に現はれたオリエンタリズム

光圀の漢詩は、故らに支那めかさない作によいものがある。自由に、のび／＼と彼の見たところ、感じたところを率直に述べた點に独自の風格が見られる。いづれかといふと、敘景よりも、抒情の方に佳什がある。また主客兩觀を交錯した作にうま味を持つてゐる。

その詩に現はれた思想は、日本的といふよりも、オリエンタルといつた方がふさはしい。唯心的に超脱を求め、清逸を愛し、淡泊や簡素を喜ぶ心持が流れ出てゐる。光圀の詩には、「歎息す兩部習合神」と歌つて、神道の純粹性を尙び、「義家の芳名諸葛に逾ゆ」といつて、源義家が兵家として孔明にまさつてゐるといつたやうなことを詠じてゐるが、それと共に東洋的趣味を深く愛したのは事實である。

○孔子像贊

上古神聖、夫子を俟つて名あり。

後世君子、夫子を以て成る。

夫子の道は、天地とともに享たみ

夫子の徳は日月とともに明かなり。

○隱者を送る

眞隱曾て名利の侵すなし。

清風颯々として塵襟を拂ふ。

只黄卷を繙く北窓の裏。

占め得たり淵明高臥の心。

○彰考館觀櫻宴席上

開落す古今の中、百花一陣の風。

經に酔ひまた史に酔ふ、酒に聖賢の功あり。

○心越禪師、短律一篇を投じて予が致仕して常州に歸るを賀す。卽席芳韻に廣く將に結ばんとする香山莊、冠を掛けて洛陽を辭す。

身は塵世を兼ねて遠く、心は野雲とともに長し。
寂爾として書牕靜かに、筑然燈影ならぶ。
考槃す巖谷の士、腹を鼓して虞唐を食む。

○今春火を蒲田の林中に避く。地靜かにして人稀なり。彼を相して幽を卜し、艸庵落成す。是に於いて坐臥偃側、自得自適し、悠然として漫筆。

地僻にして嘉致を得たり、四隣松竹高し。

月は篩ふ千畝の影、風は奏づ五湖の濤。

足れり矣蝸舍を營む、樂む且に鸚鵡に集るを。

何ぞ羨まん輪奐の美、只喜ぶ此の堅牢を。

○大方高岡に上る、安積澹泊來會す

遠人偶々來り止り、解后相逢ふを喜ぶ。

舊を話して多情密に、高きに上つて萬景供る。

稻田翠浪を翻し、松蔭金風すずし。

昔火
松竹高し
安積澹泊來會す
遠人偶々來り止り
解后相逢ふを喜ぶ
舊を話して多情密に
高きに上つて萬景供る
稻田翠浪を翻し
松蔭金風すずし

終日屢々酒をたのしむ、更に澆ぐ磊塊の胸。

○脩竹暑を受けず、琴の字を得たり

脩竹垂垂として翠蔭に坐す。

知らず九夏溽暑の侵すを。

此の君借取す涼風の手。

弾じ得たり無絃増節の琴。

○新春吟

華田今半ばを過ぐ、屠蘇漸く後酌、

偶々随ふ壯士の列、未だ減ぜず少年の心。

松は自ら門を夾んで立ち、鳥は初めて谷を出て吟ず。

春來つて先づ陟帖す、瞻望す筑波の陰。

○賢息九成の初度を賀す

始めて仕へて春秋に富み、官途大猷を抱く。

巧名長へに朽ちず、人世久しく留まり難し。

顔回の短きをいふ勿れ、奚ぞ彭祖の壽をなさん。

我聞く仁者は壽なり、何をか願ひ亦何をか求めん。

○九月十三夜

九月の佳名我邦に鳴る、

曾て聞く雅什忠通に始ると。

時これ善して遘ふ桂花の會、

節去つて猶香し籬菊の風、

連夜の渴望今夜足る。

季秋再び得たり仲秋の中。

來賓の行雁數行の字、

清光を點破して紙窓に臨む。

以上の詩は、光圀の清く高い生活、淡泊・洒脱な生活をよく現はしてゐる。多くを求めず、

寡慾に甘んじて、靜かに自然、人生に對し、悠々迫らぬ佛が見える。

文藝の人光圀、思想の人光圀、そこに彼の個性の優秀と卓越とが示され辭句詞藻以上に大きく映る彼の姿に渴仰を禁じ得ない。左に儒醫井上玄桐の光圀讚を掲げてこの篇を結ばう。

世人の公を讚め奉るに、聖人にてまします、賢人にてわたらせたまふなど申すを臣ら聞きて申すやうは、公の御風儀、聖賢に志したまひしとは存じ奉らず。只々英雄と申し奉るべし。この二字に於いては的々當々、分毫も愧づる所なしと申し奉りける。今思惟仕るに、古今英傑は德行不備のもの多かるべし。只その英武萬傑一世に卓絶したるを以て得たる名にて、倫理名教の上に於いては、缺略往々多きこと、世々の英雄皆然り。

公は學六藝を綜べ才庶物に周く、忠廟堂を輔け恩封疆を濡し孝友家族に篤く、信義交遊に伸び、嫡庶の分を正し進退の機を審かにし、聲色に溺れず讒佞に惑はず。かくの如くの徳兼備し給へば、普通の英雄に比し申すべきにあらず。賢人と喚び奉るとも愧づべからざるか。

徳川光圀年譜

年	號	年	齡	事	蹟
寛永五年	一	歳	六月十日、水戸橋町の三木之次宅に出生。		
同七年	三	歳	初めて文字を書く。		
同九年	五	歳	水戸城に入る。		
同十年	六	歳	世子となる。十二月、江戸に上る。		
同十一年	七	歳	將軍家光に謁す。		
同十三年	九	歳	元服、光圀と名乗る。		
同十六年	十二	歳	隅田川を泳ぎ切る。		
同十七年	十三	歳	初めて日光参詣。		
正保二年	十八	歳	修史の志を起す。		
承應三年	二十七	歳	近衛信尋の女を娶る。		
明暦三年	三十	歳	修史事業開始。		

萬治元年	三十一歳	夫人薨す。
寛文元年	三十四歳	頼房薨去、襲封。
同五年	三十八歳	朱舜水招聘、筑波登山。
同六年	三十九歳	宗教革新。
同九年	四十二歳	大旱につき民を救恤す。
同十二年	四十五歳	史局を小石川本邸に移す。これを彰考館と命名。
延寶二年	四十七歳	鎌倉に旅行。
同三年	四十八歳	勅題「雪朝遠望」の詩を上る。
同四年	四十九歳	儒臣の刺髪を東髪に改めしむ。
同六年	五十一歳	大能村に牧場を開く。
天和元年	五十四歳	勅を奉じて詩五十篇、歌五十首を上る。明僧心越、公に謁す。
同二年	五十五歳	詔により鳳足硯銘を上る。朝鮮使節の非禮を詰る。
同三年	五十六歳	宸翰を賜り「備武兼文絶代名士」と敕賜あり。
貞享元年	五十七歳	尙齒會詩等を朝廷に献上。

同三年	五十九歳	『禮儀類典』の一部成る。
同四年	六十歳	那須國造碑再興、元祿四年成る。
元祿元年	六十一歳	大船快風丸を北海に赴かしむ。
同二年	六十二歳	『扶桑拾葉集』刊行、後西院天皇に奉獻す。
同三年	六十三歳	致仕、權中納言となる。綱條襲封。
同四年	六十四歳	西山莊に隠棲。
同五年	六十五歳	大楠公表忠碑を湊川に建つ。
同七年	六十七歳	幕府の召命により出府、奸臣藤井紋太夫を手討ちにす。
同九年	六十九歳	救荒食法頒布。
同十年	七十歳	馬場御殿に經書を講ぜしめ、農民らの聽講を許す。
同十一年	七十一歳	史館の分館を水戸に置く。
同十三年	七十三歳	『釋萬葉集』の一部成る。十二月六日薨去、諡して義公といふ。



德川光圀

昭和十六年十一月十五日印刷
昭和十六年十一月十八日發行

著者

高須芳次郎

印刷者

佐藤義亮

東京市牛込區矢來町

發行所 新潮社

電話牛込

會員登錄番號 一三〇八七
八八八八八〇五番
〇〇〇〇八七六番
九八七六六番

振替東京八〇八番

東京市神田區淡路町二丁目九番地

配給元 日本出版配給株式會社

〔外地定價壹圓拾錢〕

定價壹圓
郵送料拾錢

東京市小石川區江西戶町富士印刷株式會社印刷

—了—

新傳記叢書目次

格規判上製美本
定價一冊一圓

ベスタロッチ……田中寛一
ミケランジェロ……板垣鷹穂
ツエツペリン……隈部一雄
バスツール……林 麟
アムンゼン……山本一清
頼 山 陽……木崎好尙
杉 浦 重 剛……猪狩史山
徳 川 光 圀……高須芳次郎

—以上既刊—

野 口 英 世……宮瀬睦夫
平 田 篤 胤……河野省三
日 蓮 聖 人……山川智應
ベイトーヴエン……河上徹太郎
キユリー夫 人……嵯峨根達吉
エ チ ソ ン……辻 二郎
ガ リ レ ー……石原 純
グ ー ……高橋健二
シ ョ バ ン……長谷川千秋
リヴィングストン……阿部知二

—以上既刊—

福 澤 諭 吉……富田正文
本 居 宣 長……久松潜一
小 村 壽 太郎……信夫淳平

1E
3X-52

版社潮新



終

